

音楽の世界

目次

論壇	日本の近代化とお雇い外国人	中島 洋一	2
特集	ヴェルディ・ワーグナーの芸術と今日への連なり		
	ヴェルディ、ワーグナーの生きた時代と舞台照明の変遷	中村 敬一	4
	私的ワーグナー論	中島 洋一	7
海外レポート	ヨーロッパ旅行記（上）	深沢 亮子	14
連載			
	音・雑記一ひなの里通信一 (60)	狭間 壮	22
	名曲喫茶の片隅から (41)	宮本 英世	24
	音盤奇譚 (46)	板倉 重雄	26
	私とラジオ・ドラマ (最終回)	助川 敏弥	28
	電子楽器レポート・連載-8、		
	アペカ電子オルガンコンペティション in 台湾	阿方 俊	30
	福島日記(22)	小西 徹郎	32
	楽壇邂逅録 ～山田耕筰と助川敏弥～	橘川 琢	34
	明日の歌を（第8回）《墓碑銘》	橘川 琢	36
コンサート報告	ピアノ部会：華麗なる響き2013	北條直彦	38
投稿	私の「未完成」論～正岡さんの所説によせて～	助川 敏弥	41
コンサート報告	ぷらイムスペシャルコンサート	橘川 琢	42
コンサートプログラム	CMDJ2013年オペラコンサート『愛の葛藤』		44
	会員活動の紹介		55
	CMDJ 会と会員の情報		56

作曲：中島 洋一

1853年7月8日（旧暦の6月3日）に米国のペリー提督が率いる黒船四隻が浦賀沖に来港してから今年で160年になる。私が小学生の頃、社会科の授業で今年ペリーが来港してから100年目に当たるという説明を受けた。幻灯機が写せる特別教室で画像を見ながらの授業だったのでよく覚えている。それは1953年のことだからその時は明治維新から85年しか経っていなかったのだと考えると不思議な気がする。しかし、私の父が生まれた時には、まだ15代将軍だった慶喜が存命していたのだから、やはり明治維新はそんなに昔のことではないのだ。黒船来航に脅威を感じた幕府は、大老井伊直弼の時に独断で日米修好通商条約を結び、それが尊皇攘夷派の怒りを買って、倒幕、明治維新と歴史を動かして行ったことは周知の通りである。

かつての攘夷派が中心勢力を占める明治政府は、急いで欧米諸国に対抗できる国力を作り上げるためには、進んだ西洋の科学技術を消化吸収する必要があると考え、優れた知識、技術を備えた欧米人を好待遇で招聘し、その指導を受けることで近代化を図ろうという政策を打ち立て、多くの外国人を招聘した。それがいわゆる「お雇い外国人」である。しかし、明治政府に限らず多くの日本人の心の根底には、技術は西洋から学んでも、日本の古来の精神は守り抜くべきだという考え方が根強くあったのだ。それがいわゆる「和魂洋才」の思想である。

ところで、お雇い外国人にはどんな人物がいたのであろうか。調べて見ると実に多彩である。音楽取調掛（現在の東京芸術大学の前身）担当官に就任して、我が国における洋楽教育の基礎を築いたルーサー・メーソン（1818-1896）、「青年よ、大志を抱け(Boys, be ambitious)」の言葉で有名なウィリアム・S・クラーク（1826-1886）もいる。しかし、ここでは、黒船来航の年に生まれ、今年が生誕160年にあたるアーネスト・F・フェノロサ（1853-1908）について触れてみよう。

彼の父は音楽家で、自分のピアノの愛弟子だった娘と結婚し、彼を生んでいる。また弟も音楽家になった。彼は学業優秀だったようでハーバード大学に入学し大学院まで進み、美術教育家または美術評論家を夢見ていたようだが、良い就職口が見つからず、また父の自殺という衝撃的な事件があり、意気消沈していたところに、お雇い外国人として、すでに日本に滞在していたエドワード・モース（1838-1925）から日本での就職という話が持ち込まれた。仕事の内容は東京大学で政治学、理財学、哲学などを講義するというものだったが、サラリーは月額280\$=300円と25才の青年だった彼にとっては有頂天になるほどの好待遇だった。当時の米価は60Kgで1.5~2円程度だったので、現在の価値で300~400万円に相当するが、人々の暮らしが今と比べ相対的に貧しかった時代のことなので、実感はそれ以上のものだったことであろう。彼が二つ返事で承諾したのは言うまでもない。

来日した彼は学生たちに思想面で大きな影響を与えたが、それと並行して、彼がもともと興味を抱いていた日本美術の研究に従事し、美術作品の調査、収拾に乗り

出す。そうした彼を嘆かせたのは排仏棄釈（はいぶつきしゃく）運動により、仏教寺院が壊され、多くの仏像が破棄されている状況だった。彼は弟子であり彼の助手となった岡倉天心の力を借りて仏教美術の目録を作り、これらの再評価を唱え、保護を訴えている。明治政府もそうした彼の言動などに動かされ、やがて古社寺保存法を制定施行し、それは現在の文化財保護法に繋がっている。

彼は古美術収集家としても有名で、「平治物語絵巻」に出逢った時には、その作品のあまりの素晴らしさに驚嘆し、売り手の言い値である500円の倍の1000円で買い取ったという逸話が残されている。彼については日本の優れた美術品を海外に持ち出したと批判する向きも一部にあるが、それほど多くの美術品を持ち出した訳ではないし、彼が持ち出した「平治物語絵巻」などの美術品は、よい状態で保管され、後にボストン美術館東洋部長になった彼の手で、同美術館に展示されている。むしろ、優れた我が国の美術品が外国の一流美術館に展示されることで、世界の多くの人々がその美術品を鑑賞する機会を得ることになり、日本美術の世界的理解と普及に貢献したといえよう。

その他にも、日本の風土、文化の魅力と価値を発見して世界に紹介したお雇い外国人が大勢いる。前述のモースは縄文時代後期の遺跡「大森貝塚」を発見し日本考古学・人類史研究の基礎を築いたし、宣教師として来日したウォルター・ウェストン（1861～1940）は、日本の自然美を発見し、『日本アルプスの登山と探検』を英国で出版している。今でも我が国における近代登山の先駆者としての彼を讃える「ウェストン祭」が、毎年6月の第一日曜日に北アルプスの上高地で開かれている。

もう一人、私の好きな人物を挙げよう。ラフカディオ・ハーンである。この人は当初は新聞記者として自主的に来日したので狭義の意味では「お雇い外国人」には含まれないかもしれないが、松江中学の英語教師をかわきりに、熊本高校、東京大学でも教鞭を取り、国から俸給を受けていたのだから、やはり「お雇い外国人」に含めるべきであろう。彼がアメリカで出版した『怪談』は、彼が取材した日本の古典や民話にもとづく創作短編集であり、その中の「雪女」、「耳無し芳一」などは日本人にも愛読されている。彼は小泉八雲として日本に帰化し、日本で没している。

政府が彼等お雇い外国人に期待したのは、「洋才」を日本人に植え付けるための指導であったはずだが、彼等の中にはそれのみでなく、日本の伝統美術、宗教、思想など「和才、和魂」にかかわるものの価値を発見し、その価値を日本人に再認識させ、また海外へ紹介した人物が少なからずいたことは、政府側が予期せぬプラス&の成果だったと言えるかもしれない。

その一方、「洋魂」に魂を揺すぶられ、キリスト教精神や自由主義思想、社会主義思想などを自分の心の糧とした日本人も大勢いる。文化、思想は、それぞれの人が自分の想いを核にして主体的に創いて行くものであり、体制側が都合のよいようにコントロールするのは難しい。政治に出来ることは、せいぜいその手助けをすることぐらいであろう。しかし、お雇い外国人に優秀な人々が多かったことは、我が国にとっても、世界にとってもラッキーなことだったといえるかもしれない。

（なかじま・よういち 本誌編集長）

ヴェルディ、ワーグナーの生きた時代と舞台照明の変遷

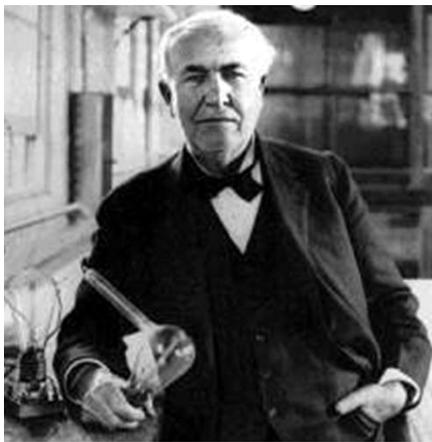
オペラ演出 中村敬一

200年前、ジュゼッペ・ヴェルディとリヒャルト・ワーグナー、二人の巨匠が生誕して、活動をした時代、彼らの仕事机の上にはランプが置かれていた。エジソンの功績で知られる白熱電球が生まれるのは、1780年代のことだ。彼らの活動の場所の劇場の中にも蝋燭のシャンデリアが吊り下げられ、まだ舞台を照らす灯りも蝋燭やランプが灯されていた。もちろん、オーケストラピ



19世紀のミラノ・スカラ座

ットの中でも、蝋燭が譜面を照らしていた。劇場の中はさぞかし、煙たかったことであろう。



トーマス・エジソン
(1847年～1931年)

エジソン電球が生活の中に入ってくるのは、19世紀も終わりになってからのことだから、彼らの創作のほとんどは薄暗い蝋燭の灯りを前提に書かれていたと云うことだ。（実際には、劇場は蝋燭からガス灯の時代を経て電気照明が導入される）

この～電気照明が無い～と云うことは大変大きなことなのだ。単に舞台が薄暗いとか、そう云うこ



とではなく、劇場というものの持つ意味を大きく変える要素を含んでいたのだ。

電気照明が生み出した最大の功績は、「真の闇」だ。つまり、全く灯りを灯していない「真の闇」は電気照明が作り出した最大の照明効果なのだ。実はこれは、舞台上だけのことではない、客席の空間も「真の闇」を得ることが出来るようになる。それまでの蝋燭やランプの明かりは途中で点けたり、消したりが出来ないわけで、観客が入る前に客席シャンデリアは灯され、そのまま、観客が客席から帰路につく

まで、点っていた訳だし、舞台の上も幕の開く前に既に灯りは灯され、同じくそれが消えたり、新たに灯されたりはしなかったからだ。

客席では、開演と共に眼に入っていた向かい側のロジェ Loge も闇に包まれ、舞台に集中できるようになった。劇場が観劇の場所であるよりも社交の場所であったのも、実は、暗くならない客席が大きな影響を与えていた。アマデウス・モーツァルトが、「誰も僕のオペラをちゃんと聞いてなんかいない。客席から聞こえるのは、戦争の話とスキャンダラスな話題ばかり」と嘆いていたのも、頷けるというものだ。



フェニーチェ劇場の客席

そして、何より、初めて舞台上にリアルな時間の変化や、心理的な表現が可能になった。登場人物一人だけに絞って灯りを集光させることも、一人の孤独を灯りで表現することもできなかつた舞台に、革命的な変化をもたらせる。それまで、書き割りと呼ばれる背景中心だったセットは、照明によってリアルに影を落とす立体的なセットに変わっていく。例えば、自然光を前提に考えられている伝統的な歌舞伎の平面的な舞台が、現代のような複雑な舞台に発展していくのだ。

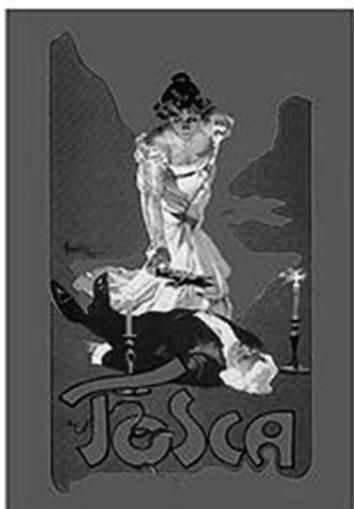


この劇的な空間で、歌い手が歌詞に乗せて時刻や天候、心理を説明するだけでは無く、実際に舞台上で演技でそれを示すことが可能になった。当然、作曲家たちも、これを利用すべく演技をするための間奏を多用するようになり、そこには事細かにト書きを書き加えるようになる。それまでの歌で綴られたドラマをオーケストラが伴奏で支えるという在り方が、オーケストラが全体のドラマの進行を形作り、その中で登場人物が心理を歌うと云う形に変遷していくことになる。

ヴェルディのオペラを眺めてみると、明らかに《アイダ》辺りから、作品の書き方が変わってきていることが読み取れる。そして、それから10年の歳月を経て誕生する《オテッロ》と《ファルスタッフ》は、明らかに、こういった舞台照明の導入という変化を背景に新しい作曲の仕方がされるに至った。

《アイーダ》の序奏から幕開きの、まるで、闇を表すような音楽の静かさや、幕切れの二人の消え入るような二重唱。《オテッロ》の幕開きの怒濤のような嵐の表現も、また、静かな1幕の終わりの二重唱の幕切れも、そうだ。

しかし、本当の意味でこの電気照明の恩恵を預かることになるのは、次の時代の作曲家たちだ。つまり、ジャコモ・プッチーニ（1858年～1924年）であり、リヒャルト・シュトラウス（1864年～1949年）たちだ。彼らのスコアを開くと、間奏部分の楽譜の段の間には、所狭しとト書きが聞き込まれている。つまり、オーケストラの音楽が流れる中、歌手達にジェスチャーを要求しているのだ。（こういったオペラの書き方をパントマイムと云う）



プッチーニの《トスカ》の第2幕の幕切れ、食卓のナイフをスカルピアに突き立てて殺した後、彼女が罪の意識から、亡骸の傍らに蠟燭を置き、彼の上に十字架を投げ出し、部屋を抜け出すあの有名なパントマイムが、正に象徴的だ。明らかに蠟燭を吹き消して薄暗くなった部屋で、最後の二本の蠟燭がスカルピアの傍らに置かれ、彼の骸がその灯りの中に浮かび上がるのをプッチーニはスコアに書き残したのだ。

リヒャルト・シュトラウスの《バラの騎士》の銀のバラの献呈のシーンや3幕の三重唱、逡巡するゾフィーの許へマーシャリンが足を進める処での長い間奏も印象的だ。彼の頭の中には既に、まるで、映画のワンシーンのような映像がはっきりと思い描かれて作曲の筆が進んでいたであろうことが思われるのだ。

因みにワーグナーの信頼を得てアシスタントもしていたE・フンパーディンク（1854年～1921年）の《ヘンゼルとグレーテル》の第二幕の終わり、森の中で、ヘンゼルとグレーテルがお祈りをして眠りに就くと14人の天使が現れるシーンも、彼はバレエのために書いたのでは無く、パントマイムで演じるように指示している。（決して、トウシューズで躍ってはならないと！）

オペラはまさに聴くものから、観るものに劇的な変化を遂げる。ちょうど、リアリズム演劇運動の洗礼と相まって、リアルな舞台作りを支えたのは、電気照明の発展で、もし、ヴェルディやワーグナーがあと50年遅く生まれていたら、彼らは全く異なったオペラの創作をしていたのかもしれない。

（なかむら・けいいち 国立音楽大学客員教授・大阪音楽大学客員教授）

私的ワーグナー論

作曲 中島 洋一

このところショパン、シューマン(1810年生)、リスト(1811年生)、そして今年のワーグナー、ヴェルディ(1813年生)と、19世紀を代表する作曲家達の生誕200年が次々と巡って来ている。本年度のオペラコンサートについて、当初はまったく異なった企画案が審議に上っていたが、その実現が難しくなった時点で、この際、19世紀を代表する二人の偉大な劇音楽作曲家の生誕200年にちなんで、それと関わりを持つコンサートを企画とするのも興味深いのではないかと考え、今回のコンサートの実行となった。しかし、ワーグナーのプログラムがどれだけ用意出来るか不安があった。我が国ではワーグナーを好んで歌う歌手は決して多くはないからである。ワーグナーを歌うには歌手の声の適性など様々な問題があるが、それについては別の機会に触れるとして、我が国における芸術作品の受容という面でも、西洋で大きな評価を受けている割には、ワーグナーは人気がない。それは、例えば西洋で最も偉大な劇作家と評価されているシェイクスピアが、我が国ではそれほど人気がないのと似ているかもしれない。ワーグナーは単に音楽分野にとどまらず、19世紀芸術世界に君臨し、20世紀の芸術にまで大きな影響を与えた人物であり、夥しい数の評伝、研究書が発刊されている。ここで、それを蒸し返しても、あまり意味がないので、ここでは、私個人の思い入れで書いた私的ワーグナー論を展開してみようと思う。

私とワーグナーとの出会い

ちゃんとしたクラシック音楽のコンサートなど、なかなか聴く機会がない片田舎に生まれ育った私にとって、少年時代に知っていたワーグナーの音楽はせいぜい『婚礼の合唱』くらいであった。

私は高校生になってしばらくして、音楽の勉強がしたくなり、独学で作曲理論の勉強をする傍ら、ときたま、音楽関係の本にも目を通すようになった。高校生の頃、まず興味を覚えたのは、ベルリオーズであった。『幻想交響曲』の物語性をもった斬新な音楽、そして彼の波瀾万丈の人生に惹かれた。ベルリオーズに関する本を読んでいる中で、しばしばワーグナーの名前が出て来た。それで少し調べてみると、ワーグナーは楽劇というオペラ概念を越えた総合芸術の創始者であること、モーツァルト、ベートーヴェンのような音楽の英才教育を受けていなかったこと、作曲の勉強はほぼ独学であったこと(実際には短期間だがテーオドル・ヴァインリヒのもとで熱心に作曲理論を学んでいる)、ベルリオーズと違い、家にはピアノがあったが、指の練習を嫌ったため、高い演奏技術を習得できなかったこと、オペラ、楽劇の台本はすべて自分自身で書いたことなど、当時の私が興味を惹くような事柄が並んでいた。

運指の勉強を嫌ったため、あまりピアノ演奏が得意でない点など、我が身と照らし合わせ「同病相哀れむ」というような共感を覚えたし、台本をすべて自分で書いたことなども、私自身もそうありたいと考え、大いに気に入ったものだった。

最初にワーグナーの劇音楽作品を耳にしたのは高校2～3年の頃で、NHKのAM放送で、バイロイト音楽祭で収録された『ジークフリート』の全曲版を聴いた時だったと思う。安物のラジオから流れるAM放送のクオリティーは決して高くはなかったが、ホルンによるライト・モチーフは楽しく聴けたし、彼が自分の音楽のためにワーグナー・チューバを開発したことなど凄いと思った。ただ、長すぎて少々聴き飽きたのも事実である。

はじめて、ワーグナーのオペラを舞台上で鑑賞したのは、多分私が大学2年の1961年、日比谷公会堂で『マイスタージンガー』が本邦初演された時のことだったと思う。旧公会堂のステージが狭いためニュルンベルクの街をセット出来ず、歌合戦は野原で行われた。また、当日は生憎の雨で、弦楽器は湿って響かず、日本の歌手たちも、その頃はまだ音量に乏しく、また聴衆に判りやすくしようという配慮からか、日本語訳で歌われ、跳躍音程の多い旋律と日本語のイントネーションとの兼ね合いが著しく不自然で、それまで生のオペラを殆ど観聴した体験のない私であっても、それほどよい出来映えとは感じられなかったが、ワーグナーの音楽の豊穡さと、その作品の初演に挑む、キャストとスタッフの熱意はそれなりに伝わって来た。

その頃からLPやFM放送でワーグナーの作品をよく聴くようになり、『タンホイザー』、『ローエングリン』、『トリスタンとイゾルデ』など、次々と全曲版のボーカルスコアを買い揃えた。私は大学入学前までは本格的な音楽教育を受けていなかったため、和声のレッスンで自分が書いた課題の回答をピアノで弾く際、嬰変記号の多い調になるとつかえてしまい、師であった島岡譲先生に、「この程度のものが弾けないのですか」などと怒られたりしたことがあったが、『トリスタンとイゾルデ』のボーカルスコアを弾きまくっているうちに、遠隔調への転調にすっかり慣れ、嬰変記号の多い調でもさして難しく感じなくなった。60年代の後半には、東京文化会館で二期会の『タンホイザー』、『パルジファル』などを観聴したが、以前に比べ日本人の演奏技術も進歩したなと感じた。もちろん旧日比谷公会堂対東京文化会館という会場の差もあるだろう。

1967年のことだったろうか、大阪国際フェスティバルホールでバイロイト引越し公演があり、『トリスタンとイゾルデ』と『ワルキューレ』が公演されたが、私も大枚をはたいて大阪まで聴きに行った。『トリスタンとイゾルデ』は、トリスタン=ウィンドガッセン、イゾルデ=ビルギット・ニルソン、マルケ王=ハンスホッターという史上最高の顔ぶれだったが、私にはピエール・ブーレーズの指揮が気に入らなかった。木管のソロなどは浮き立って聴こえ、響も美しいのだが、テンポが速すぎて、カール・ベームの指揮したLPを聴き慣れた私には、内面的深さに欠けるように感じられた。しかし、全盛期のビルギット・ニルソンの音量には驚愕し、圧倒された。一方トーマス・シッパースの指揮による『ワルキューレ』は音楽的に素晴らしい出来映えと感じた。ただ、ヴィーラント・ワーグナーの演出は気に入ら

なかった。ワーグナーの音楽は厚く豊穡なので、視覚面は能のように質素なものにしてバランスをとるとというのが彼の言い分だったと思うが、豊穡でカラフルな音楽と、色彩を抑えた舞台とではイメージが咬み合わないように感じた。

ところで、大学4年頃になると私の興味の対象は、アルバン・ベルク、マーラー、ドビュッシーなどに移り、ワーグナーからは次第に遠ざかって行った。

日本人とワーグナー

大分昔の話だが、音楽評論家の故山根銀次氏がワーグナーの芸術について、「これほど嫌らしいものはない」と述べていた。若い頃はワーグナーを研究対象とし、ワーグナーの『芸術と革命』を翻訳している氏ではあるが、正直な気持ちを語ったのではなかろうか。

ところで、文学畑の人ではどうであろうか。文芸評論家の故江藤淳は『トリスタンとイゾルデ』の音楽の印象を「地獄の釜開き」と評している。三島由紀夫の映画『憂国』では、『トリスタンとイゾルデ』が背景音楽として使われている。『トリスタン』の前奏曲のように長い倚音と半音階的声部進行を多用した音楽では、音楽的訓練を受けた人と、文学者など、あまり音楽的訓練を受けていない人とでは聴こえ方が違うのではなかろうかという気がしていたので、音楽好きだが素人の友人の前でトリスタンの前奏曲を弾き、「何を感じるか」訊ねてみたところ、少し間を置いて彼は「悲恋」と応えた。一方、某音大の2年生の授業で、トリスタンの「前奏曲」と「愛の死」を鑑賞させて感想を述べさせた。ある女子学生が「豊かで幅広い響を持つ音楽と感じた」と答えた。「暗い感じがしなかったか」と質問すると「暗さは感じない」という。もし聴音の試験（音符を聴いた通りに書き取る試験）でも行えば、多分音大生の方がずっと高い点数を取れるだろうが、音楽で表現されているものの受け止め方については、その音大の女子学生より、江藤淳氏や、素人の音楽好きの友人の方が深い気がする。

このような音楽芸術を深く鑑賞するには、訓練された耳だけでなく、文学や哲学などで培った内面的素養も重要な条件になることを改めて感じた。

NHKは公共放送という性格上、文化的な価値を配慮し、視聴率が低くとも放送するが、昔、ワーグナーのバイロイト音楽祭の録画を教育テレビで放送した際、視聴率は0.1%程度で、殆ど誰も観ないような番組を放送すべきでない、と一部の視聴者から批判があったと聞いている。これが、我が国におけるワーグナーの芸術作品の受容の現状なのであろうか。

西洋におけるワーグナー

1960年代前半の頃だったと思うが、NHKのラジオでワーグナーの特集番組があった。多分クラウス・プリングスハイムかマンフレート・グルリット（いずれも日本に帰化したドイツ生まれの作曲家兼指揮者）のどちらかだったと思うが、上手な日本語で「私は13才の時、初めて『タンホイザー』を観て、その晩は感動と興奮の余り寝付かれなかった」と語っていた。音楽的な耳を持つ多感な西洋の少年なら、ありがちなことであろう。彼の芸術の影響力は、音楽の領域を超え、文学など他の芸

上では倚音であり、倚音が解決した☆の部分の和音は増3 4 6（フランス6）であるが、倚音が出現した時点の★の部分には、倚音のG#が長く5拍に及ぶため、変ホ短調のII7の和音にも聴こえる偶成和音を形成し、調性的に不安定な印象を与えている。実はこの冒頭の3小節に「前奏曲」全体の構成が凝縮されている。なお、参考のため、楽譜下に我が国で普及している日本式和音記号を記載しておく。

この曲のクライマックスではイ短調からもっとも遠い変ホ短調になり、冒頭のテ

譜例2

es: II₇ V₉ * II₇ V₉ * II₇ a: V₇[?] V₇

ーマを内包させながら★の和音はII7の和音として表れる（譜例2）。そして、クライマックスに達し、弦楽器が激しく下降し☆のところでイ短調の増3 4 6の役割に戻る。『トリスタンとイゾルデ』は演奏時間が正味4時間に及ぶ大作だが、多忙なワーグナーには、かなり短期間で作品を仕上げている。おそらく悩ましい情熱に駆られながら筆を進めたことと思うが、決して自己の感情に溺れ、構造的なバランスを失うようことはなかった。若い頃、作曲家を目指していたトスカニーニが、この作品に触れ「自分にはこれを超える作品はとても書けない」と作曲家への道を絶つ決断をしたとも言われるが、煮えたぎるような情熱に身を焼かれそうになりながらも、決して創造者としての厳しい自己制御力を失うことはなかったのだ。この作品からも、作者の強靱な自我が読み取れると思う。

豊かに病んだ西洋近代を代表する芸術家

20世紀も終わりに差しかかった1994年の頃だったと思うが、文芸評論家の江藤淳が19世紀末と20世紀末を比較して、「19世紀末は人間の魂にとって不安と苦難の時代だったが、芸術的には非常に実り多い時期であった。しかし20世紀末は人間がコンピュータを操作することでエネルギーを消耗してしまい、芸術的創造力を枯らしてしまっている。」とラジオで語ったのを強く記憶している。当時、私はコンピュータに向かうことが多かったので、まるで私自身への警鐘のように受け止めてしまったのであるが、コンピュータは別として、19世紀の魂の不安は、100年後の20世紀末どころか、現代にまで続いているように思える。しかし、一概にコンピュータのせいとは言えないだろうが、江藤淳が語ったように、現代は芸術文化の上で実りの多い時代ではないという説は、かなり当たっているような気がする。

西洋史における18世紀末～19世紀には、多くの人々が権利意識に目覚め、幾多の革命、戦争を経て共和政治を実現させて行く。一方、個の解放は欲望の解放でも

あり、それは科学技術、産業を発達させ、富める者を生み出すとともに、貧しい者も生み出す。精神主義と物質主義の葛藤、物と心の分離、繁栄とそれにとまなう社会矛盾、また多くの個人のプライドと欲望が民族主義、国家主義の大波を生み、常に戦争、革命の危機を孕んでいた時代、ワーグナーが活躍した19世紀後半とは、一口に云えばこんな時代だったのではないか。しかし、19世紀、特にその前半の時代は、若者が無限に自分の可能性を切り開けるように思えた時代であったともいえる。それまで誰も成し遂げなかったような新しい芸術の創造、より理想に近い社会の実現、ワーグナーも自分の可能性を信じ、大きな夢と希望を抱きながら大海原に自分の舟を漕ぎだして行った。そして、激しい欲求と強靱な意志力により、幾度の挫折、失敗を味わいながらも、次々と自分の夢を実現させて行く。その過程で、社会や、多くの人々との間に軋轢も生じ、それらのことが彼の自意識を強め、自我を肥大化させて行く。彼は1849年5月ドレスデンの革命に荷担したことにより、それからかなり長い年月にわたり政治犯として指名手配される身となる。彼が一貫した社会主義思想を抱いていたとは思えないが、物質中心主義のイギリス資本主義に対しては批判的で、『ニーベルングの指輪』の序劇「ラインの黄金」において、ラインの乙女との恋を諦め、ラインの黄金を盗む地下のニーベルン族の小人（こびと）アルベリヒを、資本家の象徴として描いている。しかし4部からなる祝祭劇『ニーベルングの指輪』の上演を実現するには自分占用の劇場が必要と思い立ち、バイエルン国王ルードウィヒ二世の庇護を受け、ようやくバイロイト祝祭劇場を完成させ、祝祭劇上演に漕ぎつける。

わたしは、ワーグナーを「豊かに病んだ西洋の近代を代表あるいは象徴する人物」と捉えている。ワーグナーの時代から世紀末、そして20世紀初頭にかけては、江藤淳が述べたように「人間の魂にとって不安と苦難の時代」と言えよう。しかし、ヨーロッパの芸術文化はこの時代に百花繚乱と花開く。美術ではフランスの印象派、後期印象派、ウィーンのクリムトなど、文学ではドストエフスキーなどのロシア文学、その他計りしれない多くの実りをもたらしたのだ。魂の不安が人間の感性を鋭敏にし、想像力を豊かにしたのであろうか。

第1回のバイロイト音楽祭はウィルヘルム1世ドイツ皇帝はじめ、各国の皇帝、貴人達を招き1876年3月11日に開催された。当日はチャイコフスキー、グリーグ、ブルックナーなどの作曲家たちも足を運んでいる。ウィル

ヘルム1世は後に「芸術家が嘗てこれほどの敬意を受けた例はなかったと言ってい

だらう」と記している。



※ 祝祭劇場から、傲然とラインの黄金で出来た虹の橋を渡って
ワルハラ神殿へ向かうワーグナー（ウィーン『ボンベ』誌の挿絵）

音楽祭後「世間のあちこちで、あの男はそのうちに神の位にも届くような、権利を要求してくるだろうと噂が立った。（「ワーグナーの生涯」ヴァルター・ハンゼン著、小林俊明訳 より引用）。それは風刺画家達にとって格好の題材となり、傲慢にふんぞり返ったワーグナーの風刺画が何点も描かれている。

しかし、本人は『指輪4部作』初演の出来映えにガッカリし、意気消沈していたようである。ワーグナーは自負心が強かったが、反面で強い自己批判力をあわせ持っていた。世間的には成功したかのように見える彼だが、深い自己懐疑に取り憑かれる時間が多かったのである。自我肥大症ともいえる彼は、見えない内面の世界で激しい心の葛藤に苛まれ苦悩していたのではないかと想像する。彼の心は、芸術上に留まらず、女性もたらす魂の安らぎと、信仰もたらす魂の救済を本当に必要としていたのではなかろうか。であるから4時間もかけて自我を解放し（トリスタンとイゾルデ）、4時間半もかけて自己否定（パルジファル）する必要があったのだと思えるのだ。

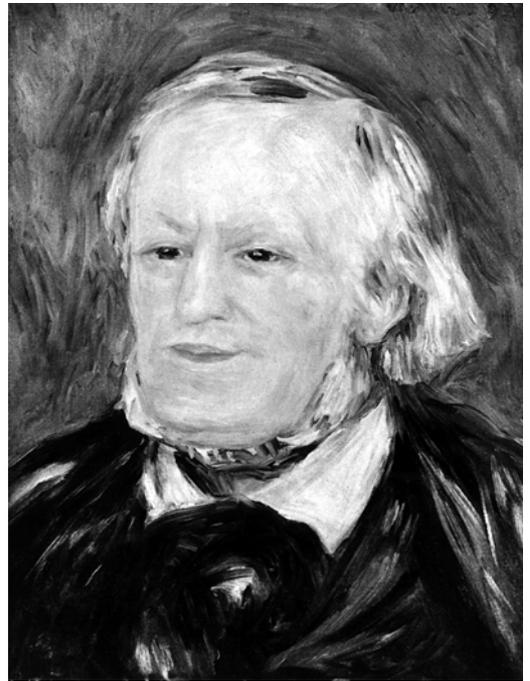
ワーグナーは1983年2月18日に心臓発作で69才の生涯を閉じるが、彼の逝去の報に接した際、もう一人の劇音楽の巨匠ヴェルディは「悲しいことだ、最大級の芸術家が亡くなった」と嘆いている。（吉田真著「ワーグナー」）。反ワーグナー派の領袖（りょうしゅう）に祭り上げられたブラームスは、合唱の練習を打ち切って弔意を表したという。（前述の著書より引用）彼の死は音楽界のみならず、様々な世界に大きな衝撃を与えた。それだけ、彼の存在が大きかったということであろう。ワーグナーは、私には栄光と矛盾をかかえた19世紀を象徴する芸術家だったような気がしている。

ところで、ワーグナーが活躍していた時代に、明治維新を迎え西洋の後を追っかけ近代化の道を歩んだ我が国だが、ワーグナーのような自我肥大症に取り憑かれる人間は少なからうし、豊穡だが演奏時間が長く表現がしつこいワーグナーの芸術を好む音楽ファンは必ずしも多くはない。

しかし、19世紀に増長した民族主義、国家主義の大波は近代化して行く我が国も飲み込み、我が国は大量殺戮が行われた二つの世界大戦に巻き込まれて行く。近代を通過しそれに続く現代の時代に生きる我々だが、自分自身を知る手懸かりを得るためにも、19世紀の芸術界をリードし、20世紀芸術への道を開いたワーグナーの芸術、人物と彼が活躍した時代について、もっと知る必要があるのではなかろうか。

（※の図版については、図説「ワーグナーの生涯」から引用しました）

（なかじま・よういち 本誌編集長）



ルノワールが描いた
ワーグナー最晩年の肖像画

オランダ、ベルギー諸都市の美術館めぐり

ヨーロッパ旅行記（上）

ピアノ 深沢 亮子

昨年の6月は、ドイツのツヴィカウで行われたR. シューマン国際コンクールを聴くことをメインに、ドイツ、ウィーンの旅行をした。今年も早くからウィーンのベートーヴェン国際ピアノ・コンクールのパンフレットが事務局から送られて来ており、何とかして行きたいと考えていた。このコンクールは私が留学していた頃、ウィーン国立アカデミーのB. ザイデルホーファー、J. ディッヒラー両教授によって創設され、今回で第14回目、50年以上の歴史を持つ。4年に一度開催され、最初の時はW. バックハウス氏が名誉審査員でいらした。かつて日本人では内田光子さんが



ウィーン：ベートーヴェン国際ピアノ・コンクール会場

1位入賞、多くの秀れたピアニスト達を輩出してきた。私自身、このコンクールは受けなかったが、ウィーンでは度々コンツェルトやリサイタル等弾いていたので多くの方々が覚えていて下さったのだろうか、審査員として1989、1993、2001

年に招かれた。その後は今井頭、園田高弘、野島稔の諸氏が招待されている。事務局の人達もすっかり入れ替わり、コンクールも以前はH. メディモレックが審査委員長だったが、今回から音楽的に全体を総める人として音楽大学のJ. J. von Arnim氏が担当された。課題曲はベートーヴェンのみでかなりレベルも高い。第1次予選は中期のソナタと変奏曲＋バガテルや幻想曲、Rondo等の作品との組み合わせ。第2次は初期と後期のソナタ、本選は2つの協奏曲を選び、2次終了後、抽選で当たった方を演奏することになっている。（ちなみにボンで行われているベートーヴェンコンクールはピアニストのギリロフ氏が創設したものだが、さまざまな作曲家の作品を混ぜたプログラムによるそうだ）コンクールは6月10日から始まったが、私の予定は第2次と本選を聴くことで、その前の1週間はオランダやベルギーの幾つかの町の美術館めぐりをしようと考えていた。昨年と同様、私の弟の大学時代の友人がこの時期は空いていて、お留守番をして下さることになり、早速、旅行会社のジャック・ラビットに飛行機やホテルの予約を頼んだ。オランダは留学生の頃行ったきりなのでとても楽しみだった。では又、日記風に旅行記を書いてみることにする。

6月8日(土)晴 早朝6時過ぎに家を出、武蔵小杉から6:52発の成田エクスプレスに乗り8時半成田到着。今回は10:35発のKL862便にて出発。2階建ての飛行機が珍しかった。アムステルダムのスキポール飛行場には予定の15:05より10分位早く着き、元生徒の矢部紀子さんが車で迎えに来てくれており大助かりだった。彼女のオランダ滞在はすでに20年近くになる様だが、すっかりこの地にとけ込んでいる。その間いろいろと大変な事があったのにも拘わらず明るく気丈。12才の双子のお嬢

さん達を育て乍ら伴奏や室内楽奏者として音楽活動を続けている。ホテルは町の中心にあるDie Port Van Cleveだった。前の通りは市電が通っており、反対側は4月30日、ウィレム・アレクサンダー新国王の即位式が行われた新教会や王宮もあった。土曜日の午後のせいか人で賑わい、アフリカやアジア系の人達も多かった。アムステルダムは土地が少ないため家の間口が狭く、隣家とのすき間もなく、細長く上空へ向けて建てられているせいか始めは一寸息苦しい感じがした。喫茶店で一休



岩田夫妻の家で夫妻と(中:筆者)

主人様が代わりに食事や飲み屋さんにご案内して下さいました。1600年代に建てられた古

音楽現代

2013年8月号 定価840円

♪特集=鎮魂の夏~宗教音楽への誘い

♪特別企画=今秋来日する外来アーティスト

~ピアニスト、オペラ団体、オペラ歌手

♪カラー口絵

・第15回記念別府アルゲリッチ音楽祭

・京都・国際音楽学生フェスティバル

・第6回地中海音楽祭

♪インタビュー=池辺晋一郎、岩崎淑、出田りあ、他

〒111-0054 東京都台東区鳥越 2-11-11

TOMYビル 3F

芸術現代社 Tel.3861-2159

みし、近くでちょっとした買物をしてからホテルで矢部さんと別れた。夕方6時にヴァイオリン製作者の岩田立氏が迎えに来て下さった。岩田さんはドイツのハレで修行をされ、アムステルダムに移られて20数年、というお話だった。奥様でヴァイオリニストの恵子さんとは20数年前、蓼科高原音楽祭でお知り合いになったが、その後彼女はオランダに移られ、10数年も前から名門オーケストラ、ロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団の第1ヴァイオリン奏者として活躍されている。今日は、ベネズエラ出身で最近評判の指揮者G. Dudamelとの公演がパリであるためお留守で、夜中に帰られるとの事。ご

い家並の中にあるレストランは、どっしりとした風格のあるお店だった。オランダの名物で、うなぎやサバ等のお魚や小えびの薫製にお野菜のついた一皿をご馳走になったが、仲々おいしかった。後に入ったお酒を頂くお店も、細長く奥まっっており、なみなみとつがれたリキュールが出て来た。腰掛ける椅子は少なく、すぐ脇ではお誕生日のお祝いに集まったらしい人々が、お酒を手にし、立ったまま喜びの合唱をしていた。

6月9日（日）晴 国立美術館とゴッホ美術館は現地では入場券が手に入りにくく、インターネットで岩田氏が切符をとっておいて下さり有難かった。朝食を済ませ、教えて頂いた⑤の電車に乗りゴッホ美術館へ。広々とした公園の中にその美術館はあり、後方にはコンサートヘボウが見え、反対側の彼方に国立美術館が建っていた。



国立美術館前で

ゴッホ美術館は1973年に開館、それまでは遺族により作品が管理されていた様だ。この4月、ようやくリニューアルが終わったところで、私は本当に幸運だった。有名な「ひまわり」「アルルの寝室」等200点もの油絵、素描が500点、弟テオやゴーギャン宛の沢山の手紙—700点もの書簡—等を見ることができた。中でも弟テオの長男誕生祝いに描いた「花咲くアーモンドの枝」は明るく、白とブルー

が美しく強く心に残った。4Fではセザンヌ、マネ、ルノワール等の作品、又ゴーギャンが描いたゴッホの肖像画もあった。ゴッホの初期の作品は色調が暗く、素朴で「ジャガイモを食べる人々」等農民の食事風景や、牢獄の囚人達を描いた絵も数点あったが、彼の眼のつけ所が興味深かった。1853年生まれのゴッホは33才でパリへ行き、色彩が明るくなり、又、当時日本の絵からも影響を受けている。その後南仏のアルルでは傑作を次々と生み出したが、ゴーギャンとの共同生活が破綻。2人は余りにも強い個性の持ち主だったのである。ゴッホは自分の耳を切り取るという悲惨な事件が起き、サン・レミの病院に入院。1890年退院後はパリの近郊、オーヴェル・シュル・オワーズで過ごし、製作活動も意欲的だったが、ピストル自殺。ゴッホの絵は激しいうねりの様な画風だが、そこには見る人の心を捕らえて放さない強い力がある。凄い天才だ。11:30に美術館を出て岩田恵子さんと待ち合わせ、彼女の運転でアムステルダムから60km程の所に位置する国立クレラー・ミュラー美術館へと向かった。それは広大な国立公園の中に建つガラス張りのもので、ゴッホの有名な「夜のカフェテラス」「アルルのはね橋」「星月夜と糸杉のある道」他私が見たい絵が沢山あった。その他ルノワール等印象派の人達の絵画が270点も展示

されており、庭園にはロダンやH.ムーア、デュ・ブッフフェー等多くの秀れた彫刻が眼に飛び込んで来る。この美術館は、20世紀初頭、財閥で熱心な絵画の収集家であったクレラー夫妻のコレクションだった。2人はオッテルローの森と一緒に国に寄贈したそうだ。この美術館を私は前から見たいと思っていたが遠方なので半ばあきらめていたのだが、岩田さんのお蔭で行く事が出来て幸いだった。岩田夫妻のお宅はアムステルダム郊外にあり、今夜はそちらで、ご主人様がバーベキューをして下さる事になった。お庭をはさんですぐ後ろにご主人の工房があり、そこでヴァイオリンの製作、直し等をされている。とてもユニークな面白い方で、ご夫妻によくして頂いた。食事の前は恵子さんと7月27日に朝日カルチャーセンターで演奏するMozartのe-mollのソナタ、SchubertのソナチネNo.2、Beethovenの「春」を合わせた。岩田夫妻ともお知り合いで、私の元生徒、近藤亮子さんも招かれて来ていたが10数年ぶりに彼女に会えて嬉しかった。

6月10日(月) 朝肌寒い。 岩田恵子さんは今日の午前中はコンサートヘボウで次の演奏会のための現代曲の練習がおありとの事。私はその会場も見たいし、少しでも練習を聴かせて頂きたかったので近藤亮子さんと一緒に午前10時より始まる練習を2F席で傍聴する。ホールは1800席。重厚な作りで客席の真中に赤いビロードの緞帳が下げられていた。聴衆が入った時と同じ状態の響きで練習を行う為だそうだ。この日はドイツの現代作曲家、ツィマーマンの作品が、H.ホリガーの指揮で始まったが、フレーズや音色、リズム等細かい注意をし乍ら何度も部分練習をしていた。オーケストラのピアノ担当の人は、隣にあるハルモニウムも弾くので、楽譜を持って立ったり座ったり忙しそうだった。オーケストラには日本人が6人 一弦が3人、管3人 も入っているそうだ。今年は創立以来125周年という記念の年なので、11月から1か月もの長い間、ロシア、中国、日本、オーストラリア各地への演奏旅行を控えているという。私達は国立美術館を見る為に途中でホールを出たが、廊下の壁にはメンゲルベルク等、歴代の著名な指揮者達の肖像画が沢山かけられていた。近藤さんと広い公園の中を歩き美術館へ。私達は先ずレンブラントの「夜警」や「解剖学のレッスン」他幾つもの名画を堪能した。彼の自画像や老人を描いた絵にも感動した。深いしわにきざまれた各々の表情には内面性と迫力がある。レンブラントはモデルをやとうお金がなく沢山自画像を描いたそうだ。フェルメールの「牛乳を注ぐ女」「手紙を読む女」「小路」等おなじみの絵もあり、



アムステルダムコンサートヘボウの練習を聴く

私達は国立美術館を見る為に途中でホールを出たが、廊下の壁にはメンゲルベルク等、歴代の著名な指揮者達の肖像画が沢山かけられていた。近藤さんと広い公園の中を歩き美術館へ。私達は先ずレンブラントの「夜警」や「解剖学のレッスン」他幾つもの名画を堪能した。彼の自画像や老人を描いた絵にも感動した。深いしわにきざまれた各々の表情には内面性と迫力がある。レンブラントはモデルをやとうお金がなく沢山自画像を描いたそうだ。フェルメールの「牛乳を注ぐ女」「手紙を読む女」「小路」等おなじみの絵もあり、

その他 F. ハルス、J. ステーン等オランダ絵画の奥行の深さ、伝統の重みを感じた。他にデルフトの焼物、1676年の珍しいドールハウスも見た。お昼は練習が済んだ恵子さんと3人で市立美術館内のレストランで食事。その後各自家やホテルに帰り、夕方再び私は電車に乗って岩田家へ。昨日の Duo の練習の続きをした。今日の恵子さんは昨日とは打って変わって別人の様な演奏で失礼乍ら驚いた。いつもオーケストラの中で、周囲と合わせなければならず、ご自分を出せないまま、それに幾らか慣れて了われるのだろうか。やはり実力のある方だ。練習の後、頭を冷やしにと、恵子さんの車で近くをドライブしたが、穏やかな田園風景に心が和んだ。所々風車が昔の面影を残し、辺りでは自転車をこぐ人達が何人かいた。夜はご主人と3人で町の中のレストランで食事。

6月11日(火) 晴 寝坊をしてしまい、朝食はぬき。毎日 頂き過ぎなので丁度良い。9時半前に近藤亮子さんがホテルへ迎えに来てくれて、市電で彼女の勤め先のオペラ劇場を見せてもらう。ここではオペラとバレエの公演が行われ、彼女は何年か前にバレエのピアニストとして大勢の候補者の中から試験に合格し、今では国家公務員の1人として活躍中。亮子さんは子供の頃から仲々勘が良く、音楽的だった。かつてオランダではお父上の仕事の関係で5年間を過ごし、その後桐朋の高校を出てすぐこちらへ留学、滞在20数年になるらしい。ホールやバレエの練習室、ステージ用のドレスを直す部屋等を見せてもらう事が出来た。帰りは2009年にオープンしたばかりのサンクト・ペテルブルクのエルミタージュ別館を見、又、近くのレンブラントハウスへ。学生の頃来た所だが、結構良く覚えていた。(ここから遠くない所にユダヤ歴史博物館もあったがアンネ・フランクの家と共に時間がなく、又アンネの家はかなり混んでいたので残念乍ら割愛した。) この家は彼が住居兼アトリエとして20年を過ごしたという。当時の台所や仕事部屋等がそのまま再現されていた。



デルフトの街

た。ベッドは家具の中に組み込まれており、いやに丈が短い。昔の人達は足を伸ばさずに寝たのだそうだ。彼の晩年は経済的に苦しく、余り恵まれなかったらしい。あれ程多くの人々の心を打つ絵を描いた画家だったのに…。レンブラントハウスを出、タクシーに乗り、新教会の中を見る。亮子さんとはここで別れ、ホテルの前で待ち合わせた恵子さんの車でデルフトへ。デルフトはフェルメールの生誕の

地。又陶器でも有名なので一度行きたいと思っていたが、恵子さんも初めてだそう

で喜んでいらした。町は小さいが清潔で明るく、途中運河があり、高い塔をもつ新教会や13世紀に建てられた市庁舎や広場は美しかった。この頃のオランダはヨーロッパの中でも有数の繁栄国で、全世界との貿易が行われていたそうだ。フェルメールの生家は今はないが、多分25番地辺りという事だった。その並びには、フェルメールが同業者達と集まったギルドハウスがあり、現在の建物は1661年に出来たものに似せて作られた。今はフェルメールセンターと云われており、そこで画家の生涯や作品を紹介していた。それにしても彼の使った青や黄や赤の絵の具の色の何と美しいことか。Den Haagでも再びフェルメールの絵に出会えると思うと心が躍る。広場のカフェで一休みし、買物を終えた私達はDen Haagへと向かった。昨年6月、東京都美術館のリニューアルが終わり、Den Haagにあるマウリッツハイスの展覧会を開催、それを見に行っていたが、機会を見つけて必ずもう一度「真珠の首飾りの少女」等のあるマウリッツハイスを訪れたい、と考えていた。しかしそこは、今改装工事中で見られず、絵画は市立美術館へ移されていた。それも以前に知ってはいたが。Den Haagはオランダ第3の都市で、官庁や各国の大使館等があり又、ベアトリックス前女王の宮殿もここにある。夕方のラッシュ時で駅の周辺は大分混雑していたが、私の泊まるHampshire Hotel Babylonは中央駅の隣にあった。午後からずっと運転して下さった恵子さんをねぎらい、2人でホテルのレストランで食事をし、恵子さんはアムステルダムに戻られた。

6月12日(水) 曇後晴
朝11時に近藤亮子さんがアムステルダムから来てくれて、2人で市電に乗り郊外の市立美術館へ。アル・デコ調の建物でモダン・アートの殿堂と云われている。中でもモンドリアンの収集として世界一だそう。他にもモネ、ピカソ、シーレ、カンディンスキー、ベーコン等の絵もあり、16世紀のオランダ絵画と共に楽しんだ。昼食後はホテルの傍にある公園内



ハーグ エッシャー美術館のシャンデリア

でのエッシャー・パレス博物館へ。日本でもエッシャーはよく知られているらしいが、だまし絵、摩訶不思議な絵に魅せられた。とんでもなく豊かなファンタジーとアイディア！この建物はベアトリックス前女王のひいおばあ様の冬の館だったそうで、幾つもの部屋があり、各々の部屋の天井には魚や傘等の形をしたシャンデリアがぶらさがっていた。ホテルで荷物を総め、夕方17:17発の汽車で途中急行に乗り換えアントワープへ。亮子さんは心配して私の乗るブリュッセル行きの汽車のプラットホームまで一緒に来て見送ってくれた。彼女は子供さんの頃は余り分らなか

ったが、細かい所まで気をつく優しい人だ。Den Haag から 2 時間位で 7 時過ぎにアントワープに到着。4F の駅の一番下からエスカレーターで上ってゆくの少し大変だったが、次の日のブリュッセル行きはエレベーターの場所がわかったので良かった。1F を見上げると天井に立派なアントワープの紋章が見えた。ベルギーにはブリュージュやゲント等、心魅かれる町があるけれど、以前二度程演奏旅行で行った事があるので今回は割愛した。

6月13日(木) 晴後雨 アントワープはベルギー第二の都市。15 世紀後半から毛織物の交易が栄え、又、ご承知の様にダイヤモンドの取り引きで発展した。ベルギー・ファッションも有名だ。私はルーベンスの住んでいた家とノートルダム大聖堂、そしてその中にあるルーベンスの傑作、三連祭壇画をどうしても見たいと思い、汽車で途中下車をし乍らこの街へやって来た。ホテルは駅の傍の Hotel Antwarb だが、そこから約 2、30 分の所にオールドシティがある。途中、ルーベンスが 1616



ルーベンスの家の中庭

年から亡くなるまで住んだ家があり、自宅兼仕事場だったそうで、内部は彼自身の作品や他の人々の絵、立派な家具が見られた。彼は偉大な画家であったが、国の重要な人物として諸外国へ赴き、大使等も務め、マリー・ド・メディスや数多くの貴族たちがその家を訪れたという。応接間や居間等実に重厚、宮殿の様な見事な建物も庭園も、隅々まで彼が考えて創ら

れたであろう事が想像出来た。ルーベンスは工房に沢山の弟子を置き、仕事を任せ、自らも絵を描き 64 才で亡くなるまで次から次へと大作を残していった。ブリュッセルのグラン・プラスを少し小さくした様な瀟洒な広場を通りぬけ、フランドル地方最大のゴシック教会、1352 年に作り始め、完成まで 169 年も費やしたというノートルダム大聖堂にも入った。左右のステンドグラスの美しさ、さまざまな画家や彫刻家の作品。そしてルーベンスの三連祭壇画「キリストの昇架」「キリストの降架」「聖母被昇天」。それ等は生き生きとしていて、今描いたばかりと云う風に見えたが(割と最近絵のよごれをとる作業がなされたそう)特に色彩の輝かしさ— 余りに鮮やかで少しとまどいも感じたが—、大胆で練れた構図、どの絵も偉大で説得力があった。子供の頃読んだ「フランダースの犬」の舞台にもなったノートルダム大聖堂。この中のルーベンスの描いた絵を一目見ようと遠方より貧しい少年ネロと愛犬パトラッシュがクリスマスの夜やって来るが、翌朝町の人々が教会の前で両者の亡きがらを見つける、という悲しい結末だった。私はネロの心の中にルーベンスの素晴らしい絵が見えた事を信じたい。帰りは広場にあるレストランで名物のベルギ

—料理— トマトをベースとしたスープで肉団子を煮込んだもの— を食したが懐かしい味だった。ホテルへ戻り夕方の汽車でブリュッセルへ向かう。乗ってから40分程の距離だった。次のホテルは中央駅直前の Le Meridian Brussels。岩田恵子さんがお電話をしておいて下さって、ブリュッセル在住の東田実果さん— 桐朋のピアノ科を出られ、今は日本人学校の音楽の先生をしておられる— がいらして下さり、グラン・プラスの近くのレストランに案内して頂いた。東田さんもさっぱりした気持ちの優しい方だった。夜はブリュッセル弦楽四重奏団のヴァイオリニスト、志田とみ子さんからお電話を頂いた。彼女は引っ越しとお嬢さんのお産でお忙しそうだった。

6月14日(金) 寒い。午前中雨。 ホテルからグラン・プラスまで歩く。12:30にモネの小ホールで先日のエリザベート王妃国際コンクール等でファイナリストだった人のピアノ・リサイタルがあると聞いたので切符を求め、昼食後ホールへ向かった。David Fung というオーストラリア人(中国系?)の若い男性で、スカルラッティのソナタ4曲、ヴィラ・ロボスの *Impressões Seresteiras*(1936)、ラフマニノフの前奏曲を2曲、ベートーヴェンの6つのバガテル op. 126 を弾いたが隅々まで神経のゆき届いた誠実な演奏だった。80席程の会場だったが響きも良く、見る見るうちに満席となった。金曜日の午後のコンサートとしてよくここで室内楽等が行われるそうだ。終演後王宮美術館を見る。以前にも何度か行っているが、素晴らしい絵画は度々見たいものだ。H. メムリング、H. ボッシュ、L. クラナッハを始め P. ブリュッゲル(父、長男も)、ルーベンス、ヴァン・ダイク、J. ヨルダン等、15、6世紀のオランダ絵画を始め、フランスの新古典主義の旗手 J. ルイ・ダヴィッドの作品もあった。又、マグリットのみを集めた階もあり面白かったが、アンソールやデルヴォー等の部屋は休館で見られず残念だった。

6月15日(土) 雨、風で寒い。 午前中から午後にかけて王宮美術館近くの楽器博物館へ。古い時代から各地の素朴なものが収集されており、中々興味深かった。特に農民の使った楽器に初めて見たものも多く、又、日本や韓国の楽器も展示されていた。お昼は博物館付属らしい10Fのレストランですませたが、窓の下にはブリュッセルの街が一望に見渡せる眺めの良い場所だった。夕方、東田さんがわざわざホテルへいらして下さり、お忙しいのでお断りしたのだが、飛行場までご一緒して下さいました。今回は一人での旅行でもあったが、知人の方々、かつての生徒達皆さんが温かくご親切にして下さり本当に有難かった。夕方10:05のSN2907便でブリュッセルを発ち20:50にウィーンへ到着。タクシーで1区、ケアントナー街に面した Austria Trend Hotel Europa へ。昔、日本大使館のあったノイエマーケットに玄関があり、当時は Hotel Europa と呼ばれていた。

(次号掲載「ウィーンでの第14回ベートーヴェン国際ピアノコンクールを聴いて」に続く)

(ふかざわ・りょうこ 本会代表理事)

一枚の葉書

北海道から葉書が届いた。中学時代の恩師、比企知子先生からのもの。普段からやりとりがあるので、表書きのその文字、一瞥すれば誰からかはすぐに分かる。先生は、1ヶ月前に亡くなっている。ということは、死者からの便りということか。

生前、「死んだら、私から葉書が届くわよ。あなたには言うておくから、驚いちゃダメよ」と電話があった。連絡する人約100人強だったか、の宛名を書き終え、切手も貼って、「準備万端、整いさうらふ」と、電話口の明るい声。・・・そんなこと……。5ヶ月前になろうか。その葉書が、本当に届いたのだ。

末期ガンとのつらい1年の闘いだっただ。その事は、多くには伏せられていたので、葉書を受けとった人は驚きであっただろう。承知していた私でさえ、あらためてドキドキしたのだから。

読売新聞（2013年7月3日付）の投書欄に一通の投稿があった。＜裏面半分にガラス絵の写真。暑中見舞には早過ぎる。添え書きにワープロで「お別れが近づきました」とあり、80年余の生涯のお礼を述べ、「どうぞ良い日を過ごされますように」と文章を結んであった。差出人の欄は、やはりワープロでお嬢さんの名前が印字されていた。空白だったのだろう。逝去の日付欄にはボールペンで6月1日とあった。死期を悟った本人が準備をしたらしい。一中略 愚痴も恨みもなくただ感謝だけを記す。その姿は消えても、なお生き続けているような思いがした。＞ 兵庫県の大西一爾さん（82）の感慨。比企先生からの葉書のことだ。

ガラス絵とは、ステンドグラス。描かれている花は、赤い花卉のモクレン。自らの年齢にちなんでか、花8輪。先生の作品だ。

先生の専門は音楽。ハイドンのオラトリオ「天地創造」などを、その巧みなピアノ伴奏で中学生に原語（ドイツ語）で指導した。つい昨日までの小学生にとって、それは強烈なカルチャーショックであった。

専門外の趣味も多く、そのいずれもが素人離れしている。そしてその一つが、ステンドグラスの制作。赤い花卉の美しいモクレンの図は、壁かけになっている。

亡くなる1年前（去年の5月）の私のコンサート。「最後になるかもしれないから・・・」と、体調の悪いのをおして休み休み、北海道から松本までやってこられた。



一本の鉛筆があれば 2012年5月12日

会場とともに歌うプログラムになって、先生が席を立ってステージの下へ。予期せぬことであった。「なんだか、出てきたくなっちゃったのよ」！ 私の手をとり、一緒に歌い始めた。

古希間近の私も先生にとれば、イガグリ坊主の中学生の教え子にしか見えな
いものかもしれない。照れる私をよそに、大きく口をあげ姿勢を正し、歌はこう歌
うのよと見本を示されているようでも
あった。

あわてて先生を紹介した。事情を知っ
た会場からは、大きな拍手が。「一本の
鉛筆があれば」Vol. 10 私の平和コンサ
ートの日のことである。

日を置かず、北海道から速達が届いた。
手紙に添えて、一枚の原稿用紙が入って
いた。それは、このコンサートの中での
私の呼びかけに応じて書かれた原稿で
あった。その呼びかけとは、「一本の鉛
筆があったら、あなたは何を書きます
か？」というものだ。



その原稿
用紙には、
第2次世界
大戦のころ
に女学生だ
った先生の、
生活が綴ら
れていた。
二度と戦争
はゴメンの
思いが、行
間からあふ

れてくる。

同様に呼びかけに応じて、50人ほど
からそれぞれの思いを綴った原稿が届
いた。私が「音楽の世界」に書いてきた

「音・雑記」から、関連すると思われる
ものを選び、それらを加えて一冊にまと
めた。書名は「一本の鉛筆があれば」。
この8月発行にこぎつけた。

コンサートにゲストで講演をお願い
した、秋葉忠利広島大学特任教授（前広
島市長）からいただいたメッセージも、
巻頭に納めた。

本ができて上がるのを楽しみに、「がんば
るよ」と言っておられた知子先生に
手渡せなかったことが、残念である。

先生の絶筆となった一本の鉛筆に托
す平和への思い。「天地創造」の始原に
還られた先生の、それは、私の活動への
応援メッセージでもあったのだ。

不肖私めが、先生と手をつなぎ「今日
の日は、さようなら・・・」を歌ってい
る写真を一枚、先生の文中に入れさせて
もらった。ありがたい。

「80年の時をすごして／お別れが近
づきました。一中略— おかげさまで楽
しく充実した日を送ることができまし
た。」と先の葉書にはあった。

鮮やかな人生の幕引き。先生！なんだ
かかっこよすぎだよ。不肖の弟子も、こ
んなふうにして、ちょっと死んでみるの
もいいかな、と思ってしまうじゃありま
せんか・・・。

先生からの最後の葉書、そして原稿
『今日の日』を読みながら、私は今、
一人娘のみどりさん宛にできあがった
本を送る準備をしている。

【筆者紹介】狭間 壮(はざま たけし)：中央大学法学部法律学科卒。音
楽教育を関鑑子氏に、声楽を大槻秀元氏に師事。大学在学中NHK「私達
の音楽会」出演を機に音楽活動を始める。松本市芸術文化功労賞、他を受
賞。夫人の狭間由香氏とのアンサンブルで幅広い音楽活動を展開している。





名曲喫茶の片隅から

宮本 英世

〔第41回〕

ショパンとジョルジュ・サンドの同棲

ピアノという楽器に惹かれたら、演奏家でもファンでも必ず聴くことになるのは、フレデリック・ショパン（1810～1849、ポーランド）の作品である。さらにショパンに興味をもったなら、多分知ることになるのは彼をめぐる3つの恋愛ではなかろうか。ピアノ曲の人気と同様、それらもまた背景として非常に有名だからである。

一つ目の恋愛は、ワルシャワ音楽院時代（16～19才）の同級生コンスタンチア・グラドコフスカとのもの（19才）だが、これはほとんど声もかけられないプラトニックな初恋というべきもの。ピアノ協奏曲が2曲生まれはしたが、実質的には恋愛になっていない。

それに対し2つ目の恋は、彼25才の時に母親の遠縁にあたる貴族の娘マリア・ヴォジンスカと愛し合ったもので、この時には本気で結婚を考えた。しかし身分の違いやショパンの病弱（結核）、生活基盤の不安定などを心配するマリア側親戚筋の反対にあって、これも結局は破局。切なさいっぱいの「別れのワルツ」が、形見として残された。

重要と思われるのは3つ目の恋愛で、これはパリで有名だった女流作家ジョルジュ・サンド（1804～1876）が相手である。ショパンよりも6才年上で、名門貴族の出身である彼女は18才の時にある伯爵と結婚したがうまくいかず、離婚してパリに出ると、7才年下のジュ

ル・サンドと同棲。彼に影響されて共作の小説などを発表したりしていた。しかし彼が身を引くと一人になり、ジョルジュ・サンドの名（本名はオーロール・デュパン）で次々と作品を発表。ショパンと知り合った頃には、すでに女流作家としてかなり有名になっていた。それだけでなく、文学・美術・政界などに知人が多く、彼らとの間にあれこれと恋の遍歴を重ねていることでも有名であった。

ショパンは、リストの愛人マリー・ダグー夫人のサロンでサンドを紹介されたのだったが、知的ではあってもズボンをはきたバコをふかす、まるで女性らしく見えない彼女に、初めはそれほど関心が沸かなかっただけ。しかしマリアとの恋がこわれ、招かれた夜会で自分を見つめる燃えるような瞳に気がつくといつの間にか心惹かれるようになっていった。

じつはサンドにはモーリス（息子1823～1889）とソランジュ（娘1828～1899）という2人の子供がおり、その家庭教師をしていた若い男マルフィーユと愛人関係にあったのだが、身体も音楽も繊細きわまりないショパンに対し、サンドの方は初めて逢った時からゾッコンであった。消極的な彼をリードするような、母性的で情熱的な愛。そして彼の音楽に対する深い尊敬——いつの間にか2人は一緒に暮らすようになり、マルフィーユの嫉妬や世間の噂から逃れ

るために、マジョルカ島へ出かけたり、ノーアンの彼女の別荘にひき籠ったりした。



ジョルジ・サンドの肖像画

2人の同棲生活は1838年(28才)から1846年(36才)まで、足かけ9年におよぶが、この間病弱のショパンをいたわり、あれこれと世話をしたサンドの献身は、何よりも音楽的な収穫に大きく貢献している。マジョルカ島逃避行の産物として知られる「雨だれ」の前奏曲をはじめ、ピアノ・ソナタ第2番、夜想曲第11番ほか、スケルツォ第3番・第4番、軍隊ポロネーズ、小犬のワルツ——など、現在人気になっている曲の大半が、じつ

はこの期間中に書かれているからである。

それほどに充実し仲よさそうに見えた2人の関係にも、やがて思わぬところから破局が訪れた。一緒に生活し始めた頃、15才と10才でショパンに馴ついていたサンドの子供たちが、やがて21才、16才と成長した結果、恋愛問題を起したりして2人の間に溝を生じさせたのである。

その発端は、サンドが姪にあたるオーギュスティーヌ・ブローという娘を養女として一緒に住ませたことだった。快く思わない妹ソランジュがつらく当たると、兄モーリスがオーギュスティーヌに味方する。何も知らないショパンが現れると、妹は味方にしようと甘えてみせるから彼女の方に傾く。兄はおもしろくなく、サンドも嫉妬から不愉快に思う。そのうちに妹に結婚話がもち上がり、田舎貴族から彫刻家に乗りかえたところ、この男がサンドの別荘を担保に借金しようと画策して失敗し、妹ともどもショパンに泣きつく。ここでショパンが反省するようサンドに手紙を書いてやったから、さあ大変！すっかり裏切られたと思ったサンドは遂に別れることを決意して「さよなら」の手紙を書く。こうして8年以上にわたる彼らの同棲生活は、後味の悪い形で終止符をうったのであった。

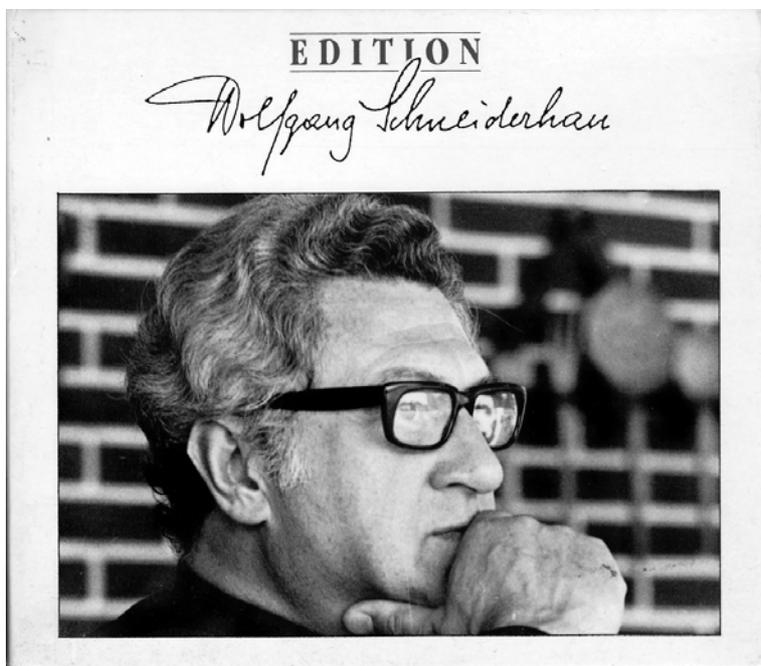
【宮本英世氏プロフィール】1937年、埼玉県生まれ。東京経済大学経済学部卒。日本コロムビア(洋楽部)、リーダーズ・ダイジェスト(音楽出版部)、トリオ(現ケンウッド)系列会社社長を経て、現在は名曲喫茶「ショパン」(東京・池袋)の経営ならびに音楽評論、著述、講演、講座などを行う。著書は「クラシックの名曲100選」(音楽之友社)、「クイズで愉しむクラシック音楽」(講談社)、「喜怒哀楽のクラシック」(集英社)など多数。



レコードコレクターの学校

平成のはじめの頃、東京には雑居ビルの一室に小さな店を構えるクラシック・レコード専門店が十数店あった。まだ輸入盤のLPレコードやCDの流通ルートが現在のように整っておらず、インターネットも無い時代のこと。それぞれの店主たちは海外に直接買い付けに出かけたり、自らのコネクションでコレクターからレコードを集めたりして、大型店にはない独特の品揃えでその魅力を競っていた。

その中で、サラリーマンになったばかりの私がいちばん入り浸ったのが渋谷、宮益坂にあったDというお店だった。わずか6畳ほどの中にレコードラックが3台、小型のステレオと店主の机だけという小さなお店だったが、品物の回転が速く、いつ行っても飾られているレコードが替わっていて、しかもコレクターの興味を惹くものだった。私はここでシュナイダーハンの6枚組CDを買い、カザルスのプラーダ音楽祭録音集8枚組CDを買い、ルフェビュールのCDを1枚ずつ揃え、エルマンが弾くヴィエニャフスキーのヴァイオリン協奏曲第2番の貴重な初期LPを譲ってもらった。



しかし、こうして得たLPやCDよりも更に貴重な財産となっているのが、このお店での座談だった。コレクターには音大のような教育の場は無く、皆独学である。コレクター同士の意見交換が何よりの勉強の場なのである。店主のMさんは温顔で笑みを絶やさず、最高の聴き上手だった。生意気盛りの私の意見やツッコミも柔らかく受け止めてくれた。こんなお人柄だから、様々な人が集まってくる。学生、銀行員、教師、

経営者、演奏家、等々。今思うと、音楽やレコードの情報交換だけではなく、バブル期日本の狂騒の中での安らぎを求めているのかも知れない。

しかしCDの流通ルートが確立し、インターネットによる情報革命が起これば、Dも時代の流れに逆らえず閉店することとなった。その後Mさんは他の経営者の下で働き、その穏やかなお人柄でファンも多かったが、先日突然亡くなられたとの報を

聞いた。Mさん、ありがとう！ここにささやかな追悼の一文を表し、心からの感謝を捧げます。

●シューベルト：ピアノ・ソナタ第21番（写真：前ページ）

●シューマン：ダヴィッド同盟舞曲集
イヴォンヌ・ルフェビュール (p)

[仏 FY FYCD078 (CD)]

1977&79年録音。ルフェビュール（1898～1986）のCDが一挙に6枚、ディスク丸山の店頭に並んでいるのを見た時は本当にびっくりした。それまで彼女の名前はフルトヴェングラーと共演したモーツァルトのピアノ協奏曲第20番のライブ録音で知られるくらいだった。しかも演奏が実に明快で鋭い感受性に満ち、録音も鮮明、加えてジャケット・デザインがいかにフランスの風を感じさせた。現在も入手可能。

●ヴォルフガング・シュナイダーハンの芸術（写真：下）

[壘 Amadeo 431343-2 (CD6枚組)]

戦前はウィーン・フィルのコンサートマスターを務め、戦後は独壘系最高のヴァイオリニストとして活躍したシュナイダーハン（1915～2002）。彼の生誕75年を記念して突如発売され、ウィーン弦楽ファンを狂喜させた6枚組。天才少年時代のSP復刻からフルトヴェングラーと共演したベートーヴェン、伝説的なシュナイダーハン四重奏団やフィッシャー・トリオでの放送録音、そしてウィーン・フィルを弾き振りしたモーツァルトまで彼の芸術を多角的に捉えた見事なセットだった。残念ながら現在は廃盤である。



.....
板倉重雄氏プロフィール】1965年、岡山市生まれ。広島大学卒業後、システム・エンジニアを経て、1994年HMVジャパン株式会社に入社。1996年8月発売のCD「イダ・ヘンデルの芸術」（コロムビア）のライナーノーツで執筆活動を開始。2009年9月、初の単行本「カラヤンとLPレコード」（アルファベータ）を上梓。



私と、ラジオ・ドラマ

最終回

作曲 助川 敏弥

「竜舌蘭の咲くとき」

この連載も 12 回を超えた。ここらで終幕ということにする。

折から、この号は八月号である。八月という月は日本人にとって運命を背負う月である。68 年前、1945 年、昭和 20 年、この月の 15 日、日本の戦争は終わった。あの時を知る世代にとっては忘れられない月と日である。あの戦争は 1941 年、昭和 16 年の 12 月 8 日、酷寒の日の朝に始まった。そして暑熱の日の正午に終わった。寒さの中で始まり暑さの中で終わった。これが反対だったらどうだったろうか。運命的である。そんなことも考える。

今回はその体験を劇化した放送劇について書いておきたい。もちろん私が音楽を担当したものだが、音楽だけではなく、このドラマについて読者に紹介しておきたいのである。ラジオ・ドラマとは不運な文学である。これが文字の文学であったら当然図書として手に入るし読む人もひろがる。しかし放送作品は記録されていない。特別に保存されるものはあるだろうが、書店で自由に入手できるものではない。

私が書こうとしているのは、三浦哲郎の書き下ろし作品「竜舌蘭の咲くとき」である。

1966 年 8 月 14 日に放送された。竜舌蘭とは九州以南に見られる蘭の一種。葉が龍の舌のような形をしているので名づけられた。この植物は 20 から 30 年かけて成長し、やがて花を咲かせる。そして、一度花を咲かせるとそこで枯れてしまう。永い生存期間の果てに花を一度だけ咲かせて死ぬ花である。この作品は、そんな花の生涯を人の運命と重ねて、戦争と人の命の運命を画き出した物語であった。この作品も竹内日出男さんの仕事であった。少し前、竹内さんと再会した時、この作品のために作者三浦さんと九州へ取材に行った話をしていた。

物語の主人公である関根は、敗戦直前 19 歳の海軍特攻隊員であった。人間魚雷「回天」の乗組員として宮崎県日向灘に面した秘密基地で訓練に励んでいた。人間魚雷とは名のごとく人が運転する魚雷である。敵艦に魚雷が命中すると中の人も死ぬ。人の命を兵器とする恐るべき兵器である。

搭乗する若者たちはそれを運命とも使命とも信じ、死を前にして訓練の中で日を過ごしている。やがて 8 月 15 日、日本は敗戦の中で戦争は終る。死を前にしていた若者たちは突然目標を失う。この訓練期間中に主人公関根は、宿泊先の農家の主婦から竜舌蘭の苗をもらいそれを庭先に植えた。それは、やがて死を定められた自分

の分身としての想いを込めたものだった。そして、敗戦とともに彼らは不条理な運命に翻弄されるまま復員しそれぞれの郷里に帰還する。

やがて1966年、昭和41年、関根は40歳となり、東北の小村の農協職員となっている。その彼のもとに、かつての基地の農家の主婦から手紙が届いた。あの時植えた竜舌蘭が花を咲かせた、と。関根は妻には十分な説明が出来ないまま、宮崎へおもむく。地形も少し変わってしまったかつての基地を訪れ、無人の洞窟となっているあの時の人間魚雷の格納庫にたたずむ。ここが19歳の自分の墓場であったことを想い感慨に沈むのであった。

かつての基地時代、農家の若い主婦には生まれたばかりの男の子が居た。主婦の夫は陸軍に入り、行方不明となっていたことを知った。

竜舌蘭に見入っていると、20歳くらいの若者が遠くから駆け寄って来た。あの時生まれたばかりだった子である。いまはたくましい青年となった姿だった。若者はとても人なつこく、竜舌蘭を前にして二人は草の上に並んで座り、若者は自分の将来の夢など語る。あの時、抱えられた子がいまでは支えることもできないたくましい若者になっている。関根は時の流れと、その中で人がそれぞれ生きてきた運命を思う。しかし、若者には若者の人生がある。若者には、竜舌蘭を見るためにわざわざ遠くからやってきた関根の心境が理解できない。「竜舌蘭なんてこの辺には幾らでもありますかな」と、無邪気に不思議がる青年に関根は、ため息をつきながら、「おじさんたちの若い時には、こんなものにしか希望が持てなかった時代があったんだよ」と、語り別れを告げる。

帰りの列車の中から海に浮かぶ盆の送り火を見て関根は、「あの花を見てしまえばこの村にはもう用はない。暗い海だ」とつぶやく。関根にとっては、あの竜舌蘭は19歳の自分の分身であった。関根の役は垂水悟郎、主婦の役は大塚道子だった。

この作品の音楽は造りやすかったとはいえない。余りにも沈痛で重い物語には音楽はつけにくい。最後に近く、竜舌蘭の姿を詳しく描写する部分につけた音楽は人の心の重さを反映する重厚にして複雑、人の心の重みを写すものでなければならなかった。

私はこの放送を仙台で聞いた。当時NHK仙台局に移動した花輪一郎さんのラジオ・ドラマの仕事で仙台のお宅を訪れた時だった。

物語の主人公関根は私より四歳年長である。私は戦争が終った時15歳。中学三年生であつた。わずか四年の違いでからくもこういう経験は逃れた。物語の関根はすでにかかなりの高齢である。やがてこの時代の経験者は時代とともに去るだろう。この物語は多くの人に知ってほしいし、ドラマも聞いてほしい。(おわり)

(すけがわ・としゃ 本会 代表理事)

中国電子オルガン界発展の Hop, Step, Jump
—アペカ電子オルガンコンペティション in 台湾—

研究：阿方 俊

香港に本部を置く、アペカ（APEKA=Asia-Pacific Electronic Keyboard Association）の第3回目の電子オルガン・コンペティションが台湾で開催され審査員として参加してきた。7月15～18日、台中市・東海大学、コンペティション参加者は約120名で大半は中国人という中国パワーにまず驚かされる。

中国の電子オルガン界といっても具体的なイメージをもつ人は多くないと思われるが、中国経済や産業のめざましい発展に勝るとも劣らない現象が楽器生産や音楽普及面でも見ることができる。中でも電子オルガン教育で、この国を代表する中央音楽学院（北京）や上海音楽学院をはじめとする国立の高等教育機関に電子オルガン科が開設されていることが挙げられる。ここで、音楽普及面から見たこの国の電子オルガン界の一端を紹介したい。

第1期（講師養成コース時代）

1985年、中国の電子オルガンの発展を見越して、ヤマハ株式会社およびヤマハ音楽振興会では、中央音楽学院と上海音楽学院との間でエレクトーン講師養成コース開講の調印式を行っている。この時の模様は、1987年の全日本電子楽器教育研究会シンポジウムの基調講演で中央音楽学院于潤洋副院長（当時）が発表している。最初の指導体制は、斎藤英美（全体統括）、後藤将也（中央音楽学院）、日野正雄（上海音楽学院）のトロイカ体制でスタートした。当時ここで教育を受けた人達の中には、今や中国の電子オルガン界をリードする中国電子オルガン学会の芦小鷗会長、王曉蓮副会長や天津音楽学院高継勇教授などがおり、同時期に日本の作陽短期大学に留学した中央音楽学院沈曉明元教授なども最初の基礎を築いた。

第2期（音楽学院電子オルガン科時代）

中国の音楽教育の中心は音楽大学ではなく音楽学院（Conservatory）にあり、中央音楽学院のほか上海、天津、瀋陽、星海、西安、ハルビン、武漢などといった国立の音楽学院に電子オルガン科が設置されている。これらの音楽学院が電子オルガン科を設置したバックグラウンドのひとつには上記のエレクトーン講師養成コース開設があったが、更に1997年に正課昇格のきっかけになったのは前年度8月、こまばエミナースで開かれた「アジアエレクトーンフォーラム」にあり、ここには各国の音楽学院を代表する人たちが勢揃いした。

中国：中央音楽学院劉康華副院長、王梅貞助教授、上海音楽学院楊立青副院長
台湾：台湾国立師範大学陳郁秀音楽学科長、台湾・東海大学郭宗愷教授ほか
ベトナム：文化情報省ファンカン局長、ホーチミン音楽学校 G. ビックク副院長
韓国：梨花女子大学オム・ジンギョン講師
日本：東京学芸大学高萩保治名誉教授、ヤマハエレクトーン音楽研究室阿方俊室長

またヤマハ株式会社から、当時のヤマハ中国の責任者であった小川恭士社長をはじめアジア各国の担当者も出席した。

当時の海外旅行は今では想像できない限られた人たちしかできない時代であったが、ここで中央音楽学院と上海音楽学院関係者にとって、日本、台湾、ベトナム、韓国のクラシック界における電子オルガンや音楽大学での教育の現状を目の当たり

にしてこの楽器に対する認識を改めざるを得なかったのではないかということは容易に想像できる。特に、発展途上国として中国の後を追ってきていたベトナムのハノイとホーチミン音楽院で既に電子オルガンコースがあるという話は他人事ではなかった。このことは、1年後の1997年秋に中央（北京）、上海、天津、瀋陽の中国を代表する音楽学院に電子オルガンの正課が誕生したことから伺える。現在、朱磊（上海音楽院）、謝及（星海音楽学院）、王永剛（ハルビン）などが学科主任として活躍をはじめ、アメリカの新しい考えや活動を紹介するTED（ted qi zhangで検索可）においても海外留学生が紹介されたり、またパイプオルガンの国際コンクールで趙偉成が上位入賞するなど指導成果が欧米においても注目されはじめている。

3. 第3期（国際化時代）

以上の流れの中で2010年に香港特別政庁認可の下でアペカが設立され、翌年から電子オルガンコンペティションが香港で2回行われ、今年度は海外の大会として前述のように台湾の東海大学（台中）で第3回目の大会が開催され、本格的な国際的展開のはしりをつくった。このコンペティションの特長として挙げられることに、コンペティションの日程の中でマスターコースおよび発展論壇（研究発表）を設けて啓蒙活動を行っていることがある。これらの活動も電子オルガン音楽や教育が今後より広く社会的に認知されるために重要なことと思われる。



審査員（後列）と運営を担当した中国・星海音楽学院の学生（前列）



1等賞の楠田しおりさん

また、今年度から新しいジャンルとしてアンサンブルの部が設けられ、電子オルガンデュオと電子オルガントリオとカルテットによるピアノ協奏曲が演奏された。通常、電子オルガンのコンクールやコンペティションといえばソロと決まっているが、新しい試みとして特筆される。

昨年度は日本からエントリーした昭和音楽大学の藤代敏裕さん、今年は楠田しおりさんが1位に入ったこともあり、近い将来、日本大会ができないものかという話題がアペカの審査員会議で出た。日本のお家芸的存在の電子オルガン界もスポーツ界のように国際化によって活性化が生まれる可能性が出てきた。まさにJumpの時代となった。

（あがた・しゅん 本会研究会員）

(22) 福島日記 作曲 小西 徹郎



”福島日記”と題して書き始めた理由は郡山のアート&デザイン系の専門学校で教鞭をとることになったからであるが、2013年の非常勤講師契約はいきなり切られてしまい、その後はWasabiの業務を通じてしか関わるることがなくなった。そのため私の収入は激減しこの半年以上収入がゼロである。あまりの事にこの福島日記をもうやめてしまおうと思っていたのだが、福島ゆくの先々を考えて、またいろんな視点でみていこうと思い、連載中止を踏みとどまってきた。そのようなこともありこれまで自分自身のことなどを書き綴ってきたのだが、ここでもう一度福島のことを、今の現状を書いておこうと思う。

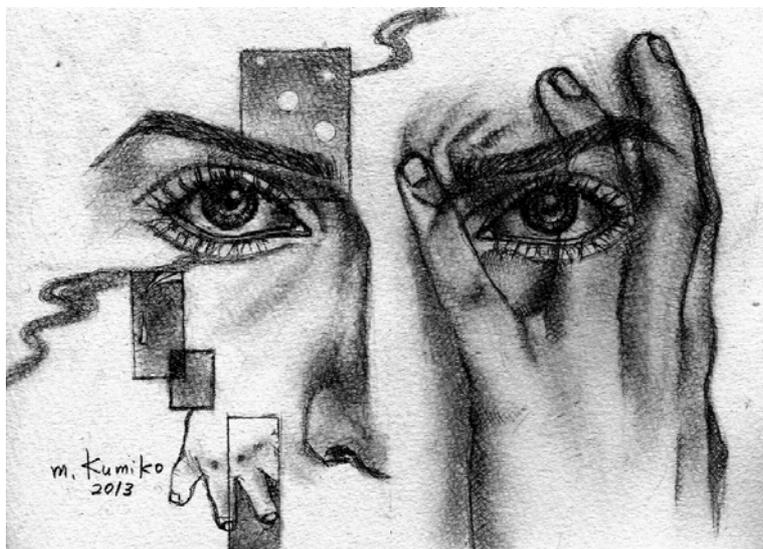
郡山駅西口前に設置された放射線量のモニタリングポストは相変わらず0.269マイクロシーベルト/毎時から動くことはない。また、郡山駅東口のモニタリングポストは昨年は1マイクロシーベルト/毎時という、非常に高い線量を示したままだったが、モニタリングポストの周りの除染を行った結果半分の0.5マイクロシーベルト/毎時程度に落ち着いた。それでも異常値である。この場では1年暮らせば被曝許容量は簡単にオーバーしてしまう。実は今だから言えるのだが、郡山駅東口に降り立って1分もすると呼吸が苦しくなるのだ。呼吸するたびに胸の上部が炎症をおこしたような痛みで襲われる。これが放射能のせいなのかは定かではないが、必ず、この線量の高い箇所の近くを通るとこういう症状が出るのだ。

駅の周り、また駅前繁華街、市民はたくさんいる。朝は高い線量のモニタリングポスト前を小学生の子供たちが元気に登校していく。以前は皆セシウムを気にしてマスクをしていたが今ではまったく無防備の状態歩いているのだ。それは子供に限らず大人も市民全体が同じようにその危機感を持っていないように思える。眼に見えない恐怖に対して感じようとしていないのか？それともあきらめなのか？

先日、東日本大震災、福島第一原発事故の際、事故現場の陣頭指揮をとった吉田昌郎元所長が食道がんのため7月9日午前11時32分に死去された。死の線をさまよったという事故現場の様子。全電源喪失という最悪の事態、注水作業を続け、海水注入作業においても東京電力本店、官邸の命令を無視して続けていなければ日本の半分は人の住めない土地になっていただろう。

こういうこと、この現場に限らず、普段の生活、社会生活の中にもたくさん存在してはいないだろうか？何が正しいのか？上層部の命令が正しいとは決して言えないだろうし、大多数の意見が正しいとは決して言えない。ましてや今、国が多くを隠している、と噂されている今、すべてが信じることができないこの今、郡山の市民の様子をみていて、ある種のマインドコントロールをされているのではないかと感じる。今や国が隠したがつていることを発言しようとする事自体がマイノリティである。マイノリティは間違いである、という意識は非常に恐ろしい結果を招くであろう。その縮図が日本国内、また福島、さらに言えばその中の一地方都市にも感じる。

多数派やマイノリティの問題の表れのひとつとして、小さな街の中でも様々な利権の絡んだ闘争が存在したりする。学校教育の中にさえ地元との軋轢や癒着が存在する。その中でヨソから来た者は、残念ながらマイナスの存在と捉えられ、結果地元の多数派と意思疎通が難しくなるケースもある。



私が専門学校で学生たちに常に言い続けてきたことは、「自身の足元を確認しながらも常に眼は世界を地球をみていることが大事だ」と。そして、社会人としての当たり前のルール、 \wedge 切を守る、時間を守る、礼儀、挨拶だ。このことを時折授業の一環として注意する。しかしこういった注意ひとつでも授業で展開したとたん、学生達や教育者たちとの軋轢が絡んで来ると、授業の本筋からそれている事、指導要綱にない

ことだからとマイナスの評価に取られ、その影響を受けた学生たちからの見られ方も変わってきてしまうという、悲しい事実もあったりした。大切な教育が、多数派、少数派という、教える側の立ち位置で歪んで受け止められてしまうのだ。

また、それとは別に、ここでも問題意識や緊張感の高い学生、低い学生というのは残念ながら如実に出てきてしまう。前者は、学生時代から起業したり、就職や研究職に着くなど、地方都市ならではの良さを生かして、準備を重ねるだろう。卒業式を輝かしい未来のスタートへと出来る学生達である。

後者は外を見ることを拒み続け、どんなにお膳立てをしてこちらが準備をしてもまったく行動を起こそうとはしない。そして卒業し、甘やかされて育ってきた代償を払わねばならない状況が待っている。こんな状態で放射能の危険やそこへの意識など持つはずもない。最終的には人のせいにして自身は悲劇の主人公を演じるしかなくなる。

ただ、もちろんすべてがそうではないことを付け加えておく。あくまで私のいた狭い環境の中ではそういうケースもあった、ということである。だが、これは一地方都市の学校の話だけではなく、何か大きな事の縮図と思えてならないのだ。

教師の職を失ってこの半年、代わりに見えてきたこともある。Wasabi を始めとするかつての教え子達や、これから先、どこかで教える未来の教え子たちへの情熱、そして、教える意欲の決して衰えてはいない自分自身である。未来の歩き方を今こそ子ども達に教えたい！その思いは変わらず、熱く燃えている。

(こにし・てつろう 本会理事)

(挿絵：前川久美子 (まえかわ・くみこ 山口芸術短期大学在学))

《明日の歌を》 特別編「楽壇邂逅録」 ～山田耕筰と助川敏弥～

聞き手：橘川 琢（作曲）

——（橘川琢）早速ですが、山田耕筰（1886年-1965年）先生と助川敏弥（1930年-）先生との出会いはどのようなものだったのでしょうか。

（助川敏弥）「山田耕筰先生のお弟子さんに、東京大学学生歌『足音を高めよ（1953年）』を作曲した末廣恭雄（すえひろ やすお／日本の水産学者、東大教授で・随筆家・作曲家、1904年-1988年）がいて、その娘さんが私の家内になったのがご縁です。娘が作曲家と結婚するというので、末廣さんが自分の師匠の山田耕筰先生に仲人をお願いすることになり、何度かご挨拶に行ったことから始まりました。」

——その後、助川先生は「山田耕筰全集（第一法規）」の編集（1963-1965年）に関わられたそうで・・・。

「第一法規は法律関連の本を出す出版社ですが、山田耕筰全集を出すことになり、編集の手伝いをするように先生からお声がかかり、編集員として勤めました。山田先生のお宅は原宿のマンションでしたが、数年後に青山一丁目の青山通りに面したマンションの4階に移りました。東京オリンピック（1964年）の聖火ランナーが走るのを窓から見て声援を送ったことを覚えています。」



山田 耕筰

山田先生の会社、日本楽劇協会の隣室が先生のご自宅でした。会社の事務所には社員が4,5人いました。仕事場との往復、事務所とご自宅のどちらかで、ときにお話などを聞きながら仕事をしていました。山田先生は校正が上がったら直筆譜と照合して直していらっしやった。今でも覚えているのは上下のスラーの掛け方にこだわりを持っていて、上段は上向きに、下段は下向きにかけてほしいという事。作業のために山田先生の自筆譜を預かったこともありました。」

——お会いしていた時の、山田先生の雰囲気はいかがでしたでしょうか。また、お仕事等の合間に、どういった雑談をされましたでしょうか。またこれだけの著名な方ですと、ご来客もかなり多かったのでは？

「風貌は堂々たる大家という風格でしたね。脳溢血で倒れた後、お体は不自由だったが、言葉は自由でした。声がとても立派で、はりのある深いバリトンでした。」

多弁な方ではなく雑談はあまりしませんでした。訪問客も、先生はご高齢だから早く切り上げて・・・といった気遣いをしているくらいで遠慮していました。当時はまだ現代ほど音楽界のヒエラルキーが出来る前だったのでしょうね。政治的な意

図で山田先生まいりをするようなことはなかったようです。藤原義江(1898年-1976年)先生や評論家の堀内敬三さんなどがときにお見えになっていました。」

——山田先生の世代と助川先生の世代(1930年前後生まれ)、音楽的な共通点や作曲について何かお話をされたのでしょうか。また、その当時の助川先生や先生世代の作曲に対する評などについては？

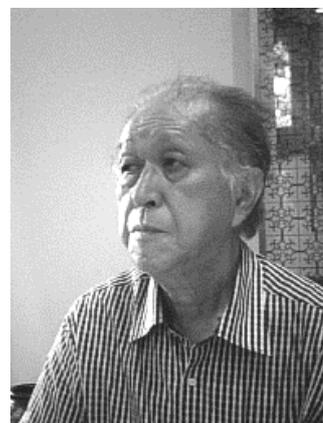
「山田先生は留学(1910年-1913年)されて当時最先端であったリヒャルト・シュトラウス(1864年-1949年)などをヨーロッパの現場で聴いておられたわけだから、現代作品と傾向に対する探究心、理解は当然おありでした。さらに西洋音楽の豪華さや厚みや豊かさを存分に知っておられました。先生自身、若い頃から、三菱系列を始め、財界、政界の実力者と接点が多い人でした。この点長い年月をかけて土地を耕し続けてきた西洋音楽の発展課程のように、つねに豊かさを志向し、貧乏くさいこと、めめしい事を嫌う人でしたよ。明治人の、国を作ってゆこうとする、一種の巨人的存在を感じました。

私の『オーケストラのためのパルティータ(1960年)』という曲が芸術祭奨励賞を受けましたが、TBSラジオで放送初演され時、山田先生から直々に『今聴きました、良かったですよ』と感想のお電話を頂いたことを良く覚えています。私たちの世代の音楽も、ラジオ、テレビからよく聴いておられ、時折、当時評判になった現代曲になかなか手厳しい評を下されたことがありました。」

——山田先生は1965年にお亡くなりになり、助川先生との接点は6年間でした。その間に音楽や、作曲論について直接教わったこと、お話されたことは？

「直接教わったというよりは、私たちが勝手に先生から感じ取ったり学んだことなのでしょうね。音楽とは物心ともに豊かな響きで出来ている、そういう美学の信念をお持ちであることをことごとくに実感しました。

しかし、当時は、やはり山田先生は、やはりずいぶん世代の離れた先輩の印象があり、当時の前衛音楽の前線にいて一番新しいものに関心を集中していた自分達(助川先生)世代とは関心の持ち方が違うという思いが、どこかしら私たちにもあったかもしれません。実際は現代曲にも十分関心を持っておられたのにね。評判の現代曲を酷評されたのには驚きました。



助川 敏弥

私たちの世代の仕事に対する感想や論評などもっとお聞きしておけば良かったといまは思いますが。今となっては少し残念な心残りがあります。」

(2013年7月7日 町田にて)

(話：助川敏弥／インタビュー：きつかわ・みがく本誌副編集長)

《明日の歌を》 — 楽友邂逅点 ガクユウカイコウテン —

橘川 琢

第八回 Intermission 『墓碑銘』・・・ある先達を訪ねて



情勢厳しい「今」のただ中で日々模索する音楽人・芸術家。自ら信じる《明日の歌》を奏でながら発し続ける「現場」の声・その後ろ姿は、ともに旅する友のエールに似ている。

八回目は、Intermission。墓碑銘について。そして音楽におけるある先達を訪ねた時の話を記しておきたい。

■橘川 琢（きつかわ・みがく 作曲家・日本音楽舞踊会議理事）



作曲を三木稔、助川敏弥の各氏ほかに師事。文部科学省音楽療法専門士。平成 17 年(2005 年)度(第 60 回記念)文化庁芸術祭参加。2006 年・2008 年度文化庁「本物の舞台芸術体験事業」に自作を含む《羽衣》(Aura-J)が、採択される。『新感覚抒情派(「音楽現代」誌)』と評される抒情豊かな旋律と日本旋法から派生した色彩感ある和声・音響をもとにした現代クラシック音楽、現代邦楽作品を作曲。現在、諸芸術との共作を通じ、美の可能性と音楽の界面の多様性、さらに音楽の存在価値を追究している。 〈Website〉 <http://www.migaku-k.net/>

■QRコードと墓碑銘

2012 年秋だっただろうか。印象的な記事があった。デンマークの葬儀社が、QRコード付の墓を売り出したのだ。QRコードの価格は 100 ユーロ（約 1 万円）で、墓石の近くに設置される。テキストや写真のほか、音声や動画も表示できるという。

また、墓石に直接刻むタイプもある。生前の写真、業績、そして祈りの言葉など、様々な情報へのアクセスが、QRコードから可能になる。昔から墓に装飾を施したり、墓碑銘を彫ることはあったが、ついにはQRコードが彫られた、もしくは添付された墓というものが登場したのだ。

QRコードの製作は実際それほど難しくはない。独特の幾何学模様がデザインとして好まれるかどうかは判らないが、こういう検索情報付の墓はこれから増えてくるかも知れない。



QRコード例

■人の思いを刻む

古代ギリシャの音符を使った楽譜を伴った最古の墓碑銘で「セイキロスの墓碑銘」というものがあるという。年代は紀元前2世紀頃から紀元後1世紀頃のもので、トルコの都市アイドゥン（Aydn）近郊で発掘された。内容は「生きています／思い悩んだり決してしないでください／人生はほんの束の間ですから／そして時間は奪っていくものですから」（Wikipediaより）というものである。さらに日本では、短編映画にもなった。

また、ジャック・フィニの短編集「ゲイルズバークの春を愛す」の中に、「愛の手紙」という短編がある。この中でも時を越えたキーワードとして、墓碑銘が出てくる。石に彫られた名前と言葉が、100年以上の時を越えて、主人公に想いを伝えるのである。

墓碑銘は死者からの、そして死者への、永遠を希求した最後の手紙ともいえる。生きた証を、何かを残したいという狂おしいまでに痛切な人の思いが、墓碑銘を、そしてQRコードまでつけた墓を欲しているのだろう。

■その名を見上げて・・・ウィーン郊外、グリンツィングにて

1997年9月、秋、学生の私はヨーロッパを一人で放浪していた。行く先も目的も決めなかったが、どうしてもここだけは！という場所があった。10代初めの頃から行きたかった場所。ウィーン郊外、グリンツィング。長年、一人の先達に会いたかったのだ。

墓石にはGUSTAV MAHLERと彫ってあるのみであり、生没年を含め他に何も刻まれていない。「私の墓を訪ねる人なら、私が何者だったのか知っているはずだし、そうでない人に訪ねてもらふ必要は無い」という作曲家グスタフ・マーラー（1860-1911）生前の遺志通り、墓石には「GUSTAV MAHLER」の文字のみ。しかし名前だけ彫ってあるこの墓のために、こうして遠く日本から放浪してきて、さらに後、創作の人生を決定付けられた学生もいる。

芸術家にとって、名前や作品に勝る墓碑銘は無いのではないか。
(了)



マーラーの墓（筆者撮影／1997年）

（きつかわ・みがく本誌副編集長）

さる、7月4日、杉並公会堂小ホールで開催された、日本音楽舞踊会議ピアノ部会第26回公演「ピアノ 華麗なる響き2013」をレポートする。今回のプログラムはロマン派、近代及び近代ロシア、現代とバラエティーに富んだ演目で興味深い。また、出演も独奏6組、連弾2組で8組と程よいバランスで演奏会の長さとしても丁度良い按配だったと言えよう。

第一部の最初は栗栖麻衣子（プリモ）山下早苗（セコンド）の連弾でストラビンスキーの“ペトルーシュカ”から、「ロシアの踊り」「ペトルーシュカの部屋」「謝肉祭」が演奏された。特に一曲目や終曲のリズム感に支えられた躍動的で歯切れの良い演奏は曲の特徴を良く捉えていて充分楽しめる良い演奏だった。ただ、「ペトルーシュカの部屋」では、予期せぬ不安感、戦慄性をもっと大胆に表現されていれば更にこの曲の広がりが大きくなり、説得力も強まったのではないかと感じたのだが。それと、この曲では、もっと強いオーケストラ的な色彩感の表現も今後の研究課題かも知れない。次の太田恵美子が弾いたのはラフマニノフの前奏曲 op. 3-2 cis-moll の「ロシアの鐘」と云われる有名な曲。それと、13の前奏曲 op. 32 から第5番 G Dur 第12番 gis-moll である。一曲目の冒頭、低音の堂々として自信に満ちた出だしはラフマニノフの世界に我々を引き込んで行くに足る十分な表現だったと言えるのではないか。また、2曲目の流れる様な美しさ、3曲目の旋律の歌い方等、細かいデテールの仕上げより大きく見たラフマニノフらしさが表されており太田の音楽性と一致している様に見え、好感を持てた次第。3番目の登場は最近、ピアノ部会や当会のコンサートでも常連になりつつある、またこの日のコンサートの実行委員でもある原口摩純。彼女が取り上げたのはリストが編曲したワーグナー「トリスタンとイゾルデ」からの「イゾルデの愛と死」、リストの「超絶技巧練習曲」より第10番 f-moll。二つともかなりの難曲と云って良い。一曲目の「イゾルデの愛と死」では、原口は曲の終了時迄充分集中していて、ワーグナー独特の官能的な響きや、果てしなく転調を続ける無限的な旋律の流れに自分を投げ出し、インパクトのある表現でこの曲をしっかりと纏め切った良い演奏だったと思う。次の超絶技巧練習曲10番は「熱情」とも云われているようだが～ベートーヴェンの「熱情」と同じ f moll とのパッションな面との共通性からか定かではないが～両手交互の早い3連符の下降フレーズと左手の幅広い音域のアルペジオ伴奏上に現れるリスト独特の情熱的な大きな旋律から成るこの曲は確かに「熱情」の名に相応しいとも云える。彼女の演奏はスピード感溢れる演奏で、この難曲を良く纏め上げていたとは思のだが、私には曲のある部分では気持ちが急いでテンポが上がりすぎた様な感じの箇所が少しあったように感じられた。構成を考えてのテンポ設定等で後半のクライマックスに繋がる音の幅、ダイナミクス等を考慮すれば更にスケールの大きい演奏に仕上がったのではないかと私には思えるのだが。今後に期待したい。このステージ、ラストの演奏は、北川暁子。当会の理事長でもあり、ピアニストと

してベートーヴェンピアノソナタ連続演奏や、つい最近では、全曲ラヴェル（鏡、夜のギヤスパール、高雅で感傷的なワルツ等）のリサイタルを催す等、積極的な活動には目を見張るものがある。今回はショパンのコンチェルト仕立ての独奏曲、アレグロ・ドウ・コンセール op. 46 A-Dur が取り上げられた。この曲はショパンのピアノ曲中、技巧的には最難曲とされる曲でもある。彼女の演奏はショパンの持つ主情性と云う面よりも構成的、客観性に重きを置いた抑制されたショパンだったと言う印象が強い。難解な技巧の所も確実な技術でさり気なく弾いてしまっていて、いつの間にやら通過していると云った所も、彼女独特の個性である。そして普段着で、自然体で音楽出来る数少ないピアニストの一人と云って良い。ショパンの甘い蜜に溺れ、のめり込む演奏が多い中彼女の突き放したショパンはショパン解釈への問題提起ともなる得るだろう。

休憩後の最初は大矢絢子がラヴェルの『鏡』から「洋上の小舟」を弾く予定だったが急用で出演出来なくなり前述の北川がその代わりを買って出てくれて彼女がリサイタルで弾いて居たレパートリーと云う事もあり「洋上の小舟」はそのまま演奏される事になった。これも平常心でいつもコンサートに臨めると云う一つの証しかも知れない。演奏は澁み無く、けれん味の無い北川らしい演奏。無理してストーリーを作ろうとせず、自分に正直に演奏するのも彼女の個性と云えようか。後半2番目は広瀬美紀子による、当会代表でもある助川敏弥の手になる「ピアノのための24の前奏曲」より第1番、第5番～初演～と日本にも縁の深かった20世紀を代表するフランスの作曲家、オリヴィエ・メシアンの前奏曲集より第8曲、「風に映る影」の演奏。第一曲目は一陣の風がさっと通り過ぎて行くかの様な短く、爽やかな曲。広瀬のピアノはこの雰囲気さをさり気なく伝えていた。2曲目は短い中に少なくない要素が詰まった曲で、初期のドビュッシーとの共通性も感じられる曲。無駄な音をそぎ落とし選ばれた音による端正な響きが印象深かったが、私には曲の長さに比して云いたい事が少し多すぎる様に思えたのだが。広瀬のピアノは澁み無く曲想を自然に伝えていた様に受け取れた。メシアンでは彼女は集中力を絶やさず、メリハリの利いた好演で、メシアンならではの独特の歌が押し付けがましくなく聞こえて来た。特にメシアンの音楽の持つ不思議な、官能性と抹香臭さが渾然一体となって聞こえて来たのが実に印象的であった。何故か、昔、西武パルコのCMにあった「不思議大好き」と云うキャッチコピーが思い出されたのもメシアンの成せる技か。次に登場の戸引小夜子を取り上げたのがロシアの作曲家、ボルトキエヴィッチのエチュード作品15から。9番、7番、10番。あまり我々になじみの無い名前だが、ラフマニノフと同世代で、ロシア革命後は国を出て主にウイーンで活動するようになったと云う。近年、再認識されつつあり、一部の演奏家に取り上げ始めているようである。ここで聞く限りではロシア的色彩はさして多くなく、むしろドイツ音楽の影響が感じられた。全体に響きは重厚で、しかし旋律的にはモーツァルト的な所もあるのだが、ウイーン風の洒落た所は持ち合わせてはいない作曲家と云う印象でもある。戸引は力強い、はっきりとしたタッチで重厚な和音の難所を弾き切り、メロディックな箇所では彼女の歌心を充分発揮していたようで、好演と云って良い。

但し、この人の曲はラフマニノフ程の旋律の強い特徴や叙情性が無いので弾き手もその辺りは纏めるのに苦労があったのではと思いやられる。最後の出演は当会代表でもある深沢亮子（プリモ）と草野明子（セコンド）の連弾によるシューベルト；4手連弾による幻想曲 f-moll。単一楽章の自由なソナタ形式の曲と云って良いが、全体は4部からなり4楽章のソナタが一つに纏められている曲とだとも考えられる第一部の内面の憂鬱を表す様なテーマは最もシューベルトらしさが現れる所でもある。遅いテンポの第2部は激しい思いを込めた和音で始まる。この一部、二部に於いてこのデュオはそれぞれの個性を生かしつつ、晩年のシューベルトの美しくも、しかし悲しみを秘めた音楽的内面を、見事に再生し表現していた様に思えた。後半のフーガの部分も畳み掛ける様に、良い感じで進んだのだが、僅かにアンサンブルの乱れがあったのは本当に残念である。普段、いつも合わせている連弾では無かった事にもよるのかも知れないが。しかし、それを差し引いたとしても充実した立派な演奏であった事には変わりはない。

最後に、この演奏会について述べると、私が、ここ、何年かの間、聴いたピアノ部会の演奏会で、今回程、充実した演奏会は無かった様に思う。今迄は、中に、光った演奏はあるものの今一つの感が強かったのだが今回は違っていた。演奏グレードも高くそして内容も、各奏者の個性が発揮されていて非常に良かったと言えよう。ただ、残念だったのはちらほらと空席が目立った事である。もっと多くの人に聞いてもらいたいと思ったのは私だけだろうか？

2013年7月15日 北條直彦 記



当日の全出演者の集合写真

私の「未完成」論 ～正岡さんの所説によせて～

作曲 助川敏弥

連載された正岡さんの「未完成」論を読んで私の所論を書きたくなった。これは正岡説への対応文ではない。きっかけとしただけで、この点正岡さんにはお詫びしておく。ただし、まったく無縁ではない。正岡さんが前号の末尾に引用した辻莊一先生の所論にかかわるからである。辻先生は、「シューベルトは伝統的な交響曲形式にこだわらず独自の音楽を作った方がよかったのでは・・・」という説を書かれている。正岡さんは、辻先生が、そういうしながら、やはり伝統の中で自分を展開してよかった、と通説に回帰していることを批判している。

私の所論もここから始まる。シューベルトはやはり伝統慣習と独自性の二律背反の場に置かれていたのではないかということである。それは、あの時代、あの場所、状況に生きた作曲家の意識の矛盾であろうと推論するのである。端的に言えば、シューベルトにおいては、あの曲に限らず、展開部に、無理、強引、不自然さ、が多い。「未完成」第一楽章の天国的な、優美で、憂いを含んだ主題が、展開部で、強引なほど断片化されて無粋な展開を受けること。二小節か四小節に寸断された、あの美しい主題が、突然、暴力的に乱入する forte の tutti に犯される場面。か弱い乙女が無粋な力仕事をさせられているように私には聞こえるのである。展開ということが、この時代の作曲家にとって恐るべき「義理」と「義務」と「脅迫観念」であったかと推測するのである。動機に寸断された主題をベートーヴェンのように展開する手法はこの時期の作曲家にとっては強迫的な義務であったのだろうか。別な例をあげれば、ドヴォルザーク「新世界」の第一楽章で、民謡風、民俗風の主題が、動機に寸断されてドイツ音楽風に、具体的にはベートーヴェンのように展開反復重複される場面がある。民謡風、民族風の主題はこういう人工的加工に適さない。ベートーヴェンの主題はそもそも分割展開に適するようにはじめから作られているのである。

シューベルトには九番か七番のおそろしく長大な交響曲がある。通称「Die Grosse」「長大」とか「偉大」とかいう意味か。こちらには不自然さがない。作曲者はのびのびと自身の楽想を伸ばしている。つまり、辻先生の推奨する方法をシューベルトはすでに実践しているのである。その結果はおそろしく長いものになった。シューベルトの本来の楽案を自然に扱えば二次元的に長くなる。

場違いな引き合いを出すことはよくないかもしれないが、ショパンにはこの矛盾がないことにあらためて感心する。二つのソナタの第一楽章では、展開部で散々あつかった第一主題を再現部では登場させないという大胆な処置を作曲者はとっている。

シューベルトもショパンも、並ぶものない天才であるが、両者の時代が幾分違うことがこの結果になったのか。ショパンはシューベルトよりも少し広い世界を国際的に知っていたせいかな。それは分らない。文学であるなら、当時の「インテリゲンチヤの意識の錯綜」、とでもいうことになるのだろう。作曲は文学ではないが、時代の制約と矛盾錯綜の圧力を受けていたであろうことが思われる。

(すけがわ・としや 本会 代表理事)

コンサート・レポート

「創建760年、建長寺の歴史に、世界最古の電子楽器テルミンが鳴り響く ～ぷら임スペシャルコンサート 語りとテルミンで紡ぐ『アグニの神』」

作曲 橋川 琢

去る7月21日、1253年創建の名刹・建長寺（建長興国禅寺）にて「～ぷら임スペシャルコンサート 語りとテルミンで紡ぐ『アグニの神』」が行われた。当日は予定していた300の座席が満席。建長寺龍王殿（方丈）の中は大変な熱気であったが、夏のさわやかな風が時折吹き抜けていき、数日前までの暑さを忘れる爽快な涼を得られた。

出演は、水沢有美（歌と語り）、「ぷら임」より大西ようこ（テルミン）、三谷郁夫（ギターと語り）、そして大野慶人（おおの・よしと／舞踏）、咲野めえこ。日本音楽舞踊会議の参加者は橋川琢（作曲）、清道洋一（作曲）、そしてスタッフとして高島和義（録音）である。

前半第一部は「アグニの神」（原作：芥川龍之介、作曲：清道洋一）。開演に先立ち、禅寺に来たご縁にと、池田伸一和尚に合わせ、客も「般若心経」を唱える。読経を通じ龍王殿全体が一体感に満ちたところで、演奏会の幕が開いた。



右から、水沢有美（歌・語り）、大西ようこ（テルミン）、三谷郁夫（ギター）
（撮影：ノスタグラフ 山崎ナオ nostagraph.com）

水沢有美の語りと歌、ぷら임（大西ようこ、三谷郁夫）の演奏、関根賢治の美術・・・すべてが綿密に絡み合い物語が進行した。途中恐怖をかき立てる場面では客席にいた子どもが実際に怖がっており、クライマックスには客席から目元をぬぐい、すすり泣く声が聴こえるなど、客の深い感情移入が伝わってきた。最初から最後まで、幾つもの役を自在に使い分けた水沢の好演・熱演が光り、大西のテルミン、三谷のギターが終始うまくサポートしていた。



建長寺龍王殿（方丈）

その中であって音楽は、多くの舞台音楽を書いてきた清道ならではの熟達した作曲により、音楽とともに物語がじわじわと積み重なるよう創られており、感情の高潮へと着実に導いた。

『出演者を最大限に生かし輝かせるため、音楽は終始裏方に徹する』という清道の作曲哲学が実に良い形で現出し、劇



音楽を創る清道の技量の高さ、音楽による演出の巧みさが存分に発揮された好例と言えよう。



満席の龍王殿
(上記、筆者撮影)

後半第二部はぷら임単体による演奏。
カッチーニの「アヴェマリア」が、テルミンの持ち味でもある繊細かつ豊かなビブラートで奏された。「48年目の愛の挨拶」では、エルガーの「愛の挨拶」に大西ようこによる詩が付けられ、三谷のやわらかで包容力のある美声で暖かな祝福を歌った。「茉莉花」では情念の強い楽想を、十分に練られた深みのある演奏で表現。

「二つの風舞」(抒情組曲《日本の小径》「古道探訪集」op. 55より/橘川琢作曲)

では、演奏の他に練達の舞踏家、大野慶人が加わった。世界的に著名な舞踏家による全身に気の行き届いた所作、すばらしい舞踏・舞が加わり、大野の一挙手一投足により満席の龍王殿の空気が瞬時に引き締まった。この日、建長寺側も『建長寺のためにこうして作品を作って下さり、演奏して下さいまして……。』と、大変恐縮されていたと、主催づてに聞いた。



舞踏家：大野慶人(左) 第二部「二つの風舞」より
(撮影：ノスタグラフ 山崎ナオ nostagraph.com)

最後に、東日本大震災からの復興を祈念して「花は咲く」を、水沢が参加し熱唱。演奏会の記念撮影が行われ、客をはじめ出演者、そして主催側の充実感をも満たした夏の古都でのコンサートの幕が閉じられた。(きつかわ・みかく 作曲部会)

【スタッフ】

清道洋一(舞台監督)/松田充博(助監督・音響)/
関根賢治(美術)/山崎尚(写真)/林優(録音)/
高島和義(録音)/宝木美穂(運営サポート)

【協力】

[建長寺]高井正俊宗務総長
[鎌倉学園校長]竹内博之校長

【後援】

鎌倉市教育委員会・逗子教育委員会・東京国際芸術協会



(撮影：ノスタグラフ 山崎ナオ nostagraph.com)

CMDJ 2013年オペラコンサート 『愛の葛藤』

～ヴェルディ、ワーグナーとその周辺の作曲家によるアリアコンサート～

ヴェルディ・ワーグナー生誕200年にちなんで

2013年9月26日(木) 18:30 開演
すみだトリフォニーホール 小ホール
主催：日本音楽舞踊会議／月刊『音楽の世界』

《ごあいさつ》

本会のオペラコンサートは2005年12月から始まり。今回で第8回目を迎えます。今年はヴェルディ／ワーグナーの生誕200年の年に当たりますので、それにちなんだガラコンサート形式の公演を企画しました。ガラコンサート形式の企画は2009年の第4回以来ですが、二人の巨匠の作品をはじめ、二人と関係の深い作曲家の作品を加え、多彩なプログラムを用意しました。コンサートのタイトルは過去の公演と同様”愛”の文字を先頭にして、『愛の葛藤』といたしました。今回の演目には、悩ましい愛、清らかな愛、悲しい愛など、様々な愛の姿が描かれています。それを世代も個性も異なる歌手たちが、それぞれの想いを込めて歌います。皆様に喜んでいただけるコンサートとなるよう、出演者一同精進を重ねてまいりました。その努力が実って、ご来場された方々に満足していただけたら、まことに幸いに存じます。どうぞ、ごゆっくりお楽しみ下さい。

日本音楽舞踊会議	代表理事	助川敏弥、深沢亮子
	理事長	北川暁子
	公演局長	北條直彦
コンサート実行委員		浦 富美
		中島 洋一 (文責)

《プログラム》

ドニゼッティ（ヴェルディの先輩）

『連隊の娘』より “望みはないわ～フランスに敬礼！”

原田 智代(Sop.)

『愛の妙薬』より “人知れぬ涙”

神林 淳(Ten.)

ヴェルディ

歌曲『6つのロマンス』より “孤独な部屋で”

今井梨紗子(Sop.)

『仮面舞踏会』より “ここは恐ろしい場所…”

高橋 順子(Sop.)

『オテロ』より “アヴェマリア”

//

『リゴレット』より “慕わしい人の名は”

今井梨紗子(Sop.)

上同 “女心の歌”

土屋 清美(Ten.)

『椿姫』より “ああ、そはかの人か～花から花へ～”

柴田紗貴子(Sop.)

上同 “ひとりきりじゃおもしろくない”

神林 淳(Ten.)

----- 休憩 -----

フンパーティンク（ワーグナーの弟子）

『ヘンゼルとグレーテル』より “踊りましょうよ”（二重唱）

箕浦 綾乃(Sop.)・実川 裕紀(M-sop.)

マスネ（ワーグナーの影響もみられるフランスの作曲家）

『ウェルテル』より “手紙の歌”

実川 裕紀(Sop.)

ワーグナー

『タンホイザー』より “エリザベートの祈り”

笠原 たか(Sop.)

歌曲『ヴェーゼンドンクによる5つの詩』より “停まれ”、“夢”

笠原 たか(Sop.)

R・シュトラウス（ワーグナーの後継者）

『ナクソス島のアリアドネ』より「偉大なる王女様」

箕浦 綾乃(Sop.)

プッチーニ（ヴェルディの後輩&後継者）

『つばめ』より “ドレッタの素敵な夢”

柴田紗貴子(sop.)

『マノンレスコー』より “なんとすばらし美女”

土屋 清美(Ten.)

ワーグナー 『ローエングリン』より “婚礼の合唱”

参加者全員

司会：佐藤 光政／ピアノ：亀井 奈緒美／企画・構成：中島 洋一

【出演者略歴】



原田 智代 (はらだ・ともよ：ソプラノ)

神奈川県出身。平成 22 年度国立音楽大学卒業。

2011 年大学院オペラ《フィガロの結婚》でバルバリーナ役で出演。

2012 年 3 月、国立音楽大学大学院修了。

2012 年 フレッシュコンサート CMDJ2012 に出演

牧山静江、小泉恵子氏に師事。



神林 淳 (かんばやし・じゅん：テノール)

国立音楽大学附属音楽高等学校を経て、国立音楽大学声楽学科卒業。

東京学芸大学大学院修了。二期会オペラ研修所マスタークラス修了。

2007 年東京学芸大学大学院オペラ公演『愛の妙薬』ネモリーノ役でオ

ペラデビュー後、『ラ・ボエーム』、『ジャンニ・スキッキ』、『リゴ

レット』、『フィガロの結婚』など、様々なオペラに出演。また、宗教

曲及びベートーヴェン《第九》のテノールソリストを務めるなど、アン

サンブルも含め幅広く活躍している。声楽を鹿内芳仁、伯田好史、福

井敬、田島好一、田中誠、小林大作の各氏に師事。

現在、二期会準会員。中央大学附属横浜中学校・高等学校非常勤講師。平山音楽院声楽講師。



今井 梨紗子 (いまい・りさこ：ソプラノ)

2004 年フェリス女学院大学音楽学部声楽学科卒業。

2005 年同大学ディプロマコース修了。

2010 年日本オペラ振興会オペラ歌手育成部第 29 期生修了。

第 76 回横浜新人演奏会、藤沢音楽家協会第 2 回推薦音楽会に出演。

牧山静江、古川博子の各氏に師事。

2011 年 4 月 日本音楽舞踊会議主催『フレッシュコンサート／同年と

2012 年にオペラコンサートに出演。日本音楽舞踊会議 青年会員



高橋 順子 (たかはし・じゅんこ：ソプラノ)

千葉県市川市出身。高等学校3年の時に岡部多喜子教授に師事する。

武蔵野音楽大学声楽科卒業。

大学、同大学院に在学中、菊地初美教授、故ロドルフォ・リッチ氏に師事。同窓会主催による千葉県新人演奏会に出演。

現在岡部多喜子教授のもとでイタリア歌曲、イタリアオペラ、日本歌曲を中心に勉学、演奏活動している。2009年/2011年/2012年のオペラコンサートに出演。日本音楽舞踊会議 正会員。



土屋 清美 (つちや・きよみ：テノール)

日本大学芸術学部音楽学科卒。

藤原歌劇団オペラワークショップ研究科修了。国枝誠也・河本喜介、マダム・バダールの各氏に師事。1980年、フランス音楽コンクールに於いてフランス総領事賞受賞、藤原歌劇団創立40周年記念演奏会、「カルメン」「ラ・ボエーム」のロドルフォ「椿姫」のアルフレード、ほか日本のオペラ「春琴抄」「天守物語」など、多数のオペラに出演。その他サロンコンサートに数多く出演。

95年より穂高絵本美術館森のおうち「歌と語りのコンサート」にレギュラー出演。蓼科高原三井の森 ハーモニーの家・高原芸術祭にも毎年出演。

03年12月横浜市開港記念会館にてリサイタル。03年12月CD「静けさに歌う」をリリースする。2005年CMDJオペラコンサート『カルメン』の、ドン・ホセ役で出演。2009年CMDJオペラコンサートに出演。日本音楽舞踊会議・日本オペラ振興会・日本演奏連盟各会員・若き芸術家協会 (YAA)副代表。



柴田 紗貴子 (しばた・さきこ：ソプラノ)

国立音楽大学声楽科卒業並びにオペラソリストコース修了。在学中、第76回ソロ・室内楽定期演奏会、卒業演奏会に出演。読売新聞社第30回読売中部新人演奏会、第78回読売新人演奏会に出演。同大学院オペラコース修了。修了時に新人演奏会に出演。

これまでに「ドン・ジョヴァンニ」ドンナ・アンナ役、「ジャンニ・スキッキ」ネッラ役、「フィレンツェの悲劇」ビアンカ役、「コジ・ファン・トゥッテ」フィオルディリージ役、「カルディヤック」貴婦人役等、数多くのオペラに出演。荘典子、秋葉京子の各氏に師事。

2013年3月に新国立劇場オペラ研修所13期生を修了し、文化庁新進芸術家海外留学制度奨学金を得て本年11月より英国へ留学予定。



実川 裕紀 (じつかわ・ゆき：メゾ ソプラノ)

千葉県出身。国立音楽大学音楽学部演奏学科声楽専修卒業、声楽コース修了。二期会オペラ研修所第56期マスタークラス修了。修了時優秀賞受賞。声楽を、高木智子、中山早智恵、小泉恵子の各氏に師事。

これまでに第12回日本アンサンブルコンクール、重唱部門にて優秀演奏者賞・全音楽譜出版社賞受賞。多摩六都フェアフレッシュコンサート新人の部出演。東京二期会主催「第89回二期会オペラ研修所コンサート」出演。オペラには「フィガロの結婚」マルチェリーナ役、「コジファントゥッテ」ドラベッラ役、「こうもり」オルロフスキー役、「ヘンゼルとグレーテル」ヘンゼル役、「アメリア舞踏会へ行く」メイド2役等で出演。二期会会員。



箕浦 綾乃 (みのうら・あやの：ソプラノ)

国立音楽大学音楽学部演奏学科声楽専攻卒業。学部3年次より歌曲ソリストコースに在籍。卒業時に卒業演奏会に出演。同大学大学院声楽専攻オペラコースに進み、昨年10月に大学院オペラ《フィガロの結婚》にケルビーノ役で出演。2012年3月、同大学院を修了。

2012年4月 フレッシュコンサートCMDJ2012 に出演

これまでに、声楽を、荻野砂和子、小泉恵子の各氏に師事。



笠原 たか (かさはら・たか：ソプラノ)

国立音楽大学楽理科及び東京藝術大学別科声楽科卒業。ドイツケルン音楽大学3年留学。帰国後ソロリサイタル、ジントリサイタル、オーケストラとの共演等行う。サリーオペラに所属しアメリカ、ロシア、京都にて数々のコンサートにソリストとして出演。2000年よりイエルク デムス氏と共に東京、京都、福岡、ザルツブルクにおいて10回以上にわたりソロコンサートを開催し好評を博す。デムス氏と共に5枚のCDもリリースしている。ウィーンフィルのメンバーとは2

回にわたって共演。2011年には京都芸術祭において京都市長賞を受賞。日本音楽舞踊会議 正会員。



亀井 奈緒美 (かめい・なほみ：ピアノ)

東京音楽大学ピアノ演奏家コース卒業。在学中より蓼科高原音楽祭に参加。室内楽を学ぶ。第3回吹田音楽コンクールピアノソロ部門入賞。家永ピアノオーディション合格者披露演奏会など多数コンサートに出演。2005年より毎年日本音楽舞踊会議主催「オペラ・コンサートシリーズ」にて伴奏を務める。また2010年かやぶき音楽堂デュオコンクールにてファイナルディプロマを取得。ヴァレリア・セルヴァンスキー、深沢亮子、弘中孝、佐藤由紀子、竹尾聆子、雄倉恵子、小田美津子の各氏に師事。現在、各地でソロ演奏、室内楽、オペラ、合唱伴奏など

幅広く活動している。音楽舞踊会議 正会員。



佐藤 光政 (さとう・みつまさ：バリトン&司会)

1966年東京芸術大学音楽学部卒業。1973年第7回パリ国際音楽コンクール入賞。同年、第42回日本音楽コンクール声楽部門第1位入賞。1990年《春琴抄》でフィンランドのサヴォリンナ・オペラフェステヴァルに参加。第18回ジロー・オペラ賞受賞。1994年に2枚組CD『佐藤光政 日本の抒情を歌う』を発刊。2000年に、『日本の名歌を歌う』を発刊。2005年から始まったCMDJオペラ公演において、ずっと司会役および重要な役を担当し、公演の中心存在として出演し続けている。

磯谷威、大槻秀元、柴田睦陸、河本喜介の諸氏に師事。二期会、日本オペラ協会、日本音楽舞踊会議、各会員。

ドニゼッティについて

ガエターノ・ドニゼッティ (Gaetano Donizetti: 1797-1848) は、ロッシーニや、ベッリーニと共に19世紀前半のイタリアを代表するオペラ作曲家である。

ベッリーニと共に、非常に高い音を含む高度なコロラトゥーラの技術を必要とするアリアを多く書いている。1848年に没しているのに、19世紀後半に多くの傑作を書いたヴェルディとは活動時期が重なっていない。しかし、現代でも多くの作品が各国で上演されている。

『連隊の娘』より“望みはないわ～フランスに敬礼！”

『連隊の娘』は1840年にパリ、「オペラ・コミック座」のために書かれた二幕のオペラコミックで、原語はフランス語であるが、イタリア語で公演されることも多い。

この曲は第二幕で、連隊の娘だったマリーが歌うアリアである。マリーはフランス軍連隊のマスコットだったが、その後、彼女が侯爵夫人の妹の子で、唯一侯爵家の血筋を引く人間であることが判り、侯爵夫人はドイツの貴族との婚約を迫る。彼女は自分のために母国を捨て仏軍の兵士となったトニオを想い、「もう望みはないわ、宝石も富みもないのに」と嘆く、“望みはないわ～” (ヘ短調4/4) すると、ファンファーレが響き、戦果を上げて隊長に昇進したトニオが兵士を連れてマリーを連れ戻しにやって来る。“フランスに敬礼！” (変イ長調3/4) 彼女は大喜びで、彼を迎える。コロラトゥーラ・ソプラノ向きに書かれた、美しいアリアである。悲しみが一転して喜びに変わるところなども聴き所である。

『愛の妙薬』より“人知れぬ涙”

『愛の妙薬』は、喜歌的な作品だが、同時代の作曲家、ロッシーニの「オペラ・ブッフア」が、軽快で底抜けに明るいものに対して、美しくロマンチックな旋律が多い牧歌劇になっている。この作品は、ドニゼッティの作品のうちで、現在で最も上演回数の多い作品に含まれよう。

オペラが一通り出来上がった後、ロマンツァを一曲加えるか否かで台本作家と意見の食い違いが生じたが、作曲家が主張を通して加えたのが“人知れぬ涙”で、このオペラのうちで、単独で歌われる機会が最も多い、名曲となった。

純情な若者ネモリーヌが「あの人の目にひそかな涙が浮かんでいる。それはきっと僕を愛しているしるし」と歌うこの曲は、変口短調6/8で叙情的な旋律を歌い、最後は同主長調となり、装飾的な動きをとまって終わる。

ヴェルディについて

ジュゼッペ・F・F・ヴェルディ (Giuseppe Fortunino Francesco Verdi (1813-1901) は、19世紀イタリア歌劇の中で最高の作曲家であることに異存はあるまい。彼は『リゴレット』以降の作品で、それまでのレティタティーヴォ様式を廃し、音楽の流れを途絶えさせず、音楽の力を強化することにより劇的説得力を高める様式を確立した。その頃、イタリアではイタリア統一運動が起こり、サルデーニャ国王ヴィットーリオ・エマヌエーレ2世を中心に進められるが、そのスローガン Viva Vittorio Emanuele Re D' Italia (イタリアの王

ヴィットーリオ・エマヌエーレ万歳)の頭文字をとると。VERDI と彼の名前になることもあり、統一運動の象徴的存在となった。その功績により彼は国会議員に選出されるが、政治にはあまり興味を示さなかったようである。しかし、晩年には老いた芸術家のための養老院建設を計画するなど、社会福祉活動にまで手を染めている。1880年以降自身の創作力の衰えを感じはじめていた彼は、ワーグナー逝去の報を知り悲しむが、『オテロ』という傑作を書き見事に復活を遂げる。

歌曲『6つのロマンス』より“孤独な部屋で”

『6つのロマンス』はオペラ作曲家として成功する前の若き日のヴェルディが書いた歌曲集で1838年に出版されており、彼の作品のうち最初に出版されたものである。

“孤独な部屋で”はヤコボ・ヴィレットリの詩につけられた 変イ長調 4/4 の歌曲。孤独な女性は苦悩と悲しみにうちひしがれ、神に救いを求める。まだ若き日の作品であり作曲手法も素朴だが、音楽ドラマの作曲家としての萌芽をみることが出来る作品である。

『仮面舞踏会』より “ここは恐ろしい場所…”

『仮面舞踏会』は、仮面舞踏会の最中にスウェーデン国王が暗殺されたという史上有名な事件を題材に書き上げたオペラである。ただ政治的な理由もあり舞台をスウェーデンからアメリカのボストンに変えていが、最近では舞台をスウェーデン、総督を国王に戻して演奏されることも多いようである。オペラは1857年冬に完成したが、政治的な理由もあり、二年後の1859年にローマで初演されている。

“ここが罪を死に結びつけるという恐ろしい場所!”は、第二幕の前奏曲が終わった後、総督リッカルトと夫レナートとの板挟みの愛に悩むアメリカが、青白い月の光に白く不気味に浮かぶ絞首台の柱をふるえながら見つめながら、愛の悩みを歌うアリアである。4/4拍子ニ短調で始まるが、「もし愛を失ったら私になにが残るの」と歌う部分では、遅いへ短調 6/8拍子となり、悲しみの深さを表すが、「地中から首が浮き上がり」と歌うところから、ニ短調に戻り、やがてへ長調に移り、神に救いを求める歌声となる。

『オテロ』より “アヴェマリア”

もちろん『オテロ』の原作はシェイクスピアの『オセロ』であり、台本はヴェルディの若き盟友アリゴ・ボイドの手による。ヴェルディが67才～73才にかけて6年間を費やして完成した作品である。深さと力強さを持つ円熟期の作品であり、和声法など作曲技法の面でも、初期、中期のものとは違った趣を持つ。

“アヴェマリア”は第四幕で、死を予感したデズデモーナが“柳の歌”を侍女のエミリアに歌ってきかえるが、エミリアが去った後、マリアに祈りを捧げて歌うアリアである。ずっと変ホの同じ音高で祈りを唱え、変イ長調で天使のような清らかなメロディーを歌う。そして、その後、愛する夫、オテロの手にかかって死ぬ。

『リゴレット』より “慕わしい人の名は”

ユーゴの原作をもとに書かれたオペラ『リゴレット』が、オペラ作家としてのジュゼッペ・ヴェルディ(1813-1901)の名を不動のものにした傑作であることはいうまでもない。これほど凄まじく陰惨な劇的世界は、プッチーニには描けなかったものと思える。

“慕わしい人の名は”は、学生に変装したマントヴァ公爵に愛をうち明けられたジルダが、すっかり公爵の虜になり「私のいとしい人の名、忘れえぬ名」と歌うこの作品中唯一のソプラノのアリアである。アリアは、ホ長調 4/4 でゆったりしたテンポで歌い始められるが、次第に高まって行くジルダの感情を、高度な声楽的技巧を用いて表現するように書かれているため、きらびやかな美しさをもつが、かなりの難曲となっている。

同 “女心の歌”

最愛の娘ジルダを自分の主人マントヴァ公爵に奪われたリゴレットは憎悪と憎しみに取り憑かれ復讐を図り、刺客に彼の殺害を依頼する。やがて公爵が軍人姿で入ってくる。そして「女心は風に舞う羽毛のようなものだ。一個所に止まってはいない」と軽薄に歌い出す。この曲はオペラファンでなくとも誰でも口ずさんだことがある名曲である。その後、ジルダは公爵の身代わりになって刺客の手にかかる。リゴレットが公爵の死体が入っている筈の袋を受けとり「ついに奴もくたばったか、ざまみやがれ」と思っていると、またこの歌が聴こえてくる。リゴレットは「奴の声だ」と、ぎょっとして袋を開けると、そこに入っていたのは、公爵の身代わりになった愛娘のジルダだったのだ。

『椿姫』より “ああ、そはかの人か～花から花へ～”

小デュマの原作をもとに 1853 年に作曲したヴェルディの代表作『椿姫』については、ここで詳しく説明する必要はあるまい。“LA TRAVIATA”は“道に迷える女”の意味であり、道を踏み外してドミ・モンド（高級娼婦）となったヴィオレッタが、かなわぬ真実の愛を求め、悩み苦しむ様を描いた愛のドラマであるが、数々の美しい旋律で彩られたこのオペラの奥底には、人間の真実を凝視し、それを表現しようとしてやまない劇音楽作家ヴェルディの鋭い眼と熱い思いがある。

ひとりで憩うヴィオレッタの心に、少し前に会った純情な青年アルフレードの面影が去来する。はじめて知った真実の恋に心を震わせ、アルフレードが歌っていた愛のモチーフを歌う。（ああそは彼の人か）

沈黙の後、彼女の心は現実に呼び戻される。自分は快樂に生きてきた女だ。眞の恋などかなわぬ身なのだ、と自暴自棄になって快樂の喜びを歌っていると、恋の喜びに満ちたアルフレードの歌声が聴こえてくる。激しく揺れ動くヴィオレッタの心。（花から花へ）

同 “ひとりきりじゃおもしろくない”

前幕（第1幕）から3ヶ月後のパリ郊外の田舎家。二人はひっそりと同棲している。幕が開くとアルフレードが庭から出てきて、田舎でヴィオレッタと暮らす喜びを素直に歌う。ハ長調 3/4 拍子（ひとりきりじゃ面白くない）。続いてアンダンテ変ホ長調 3/4 拍子になり、「ヴィオレッタと暮らすようになってから自分はすっかり変わった。今の毎日は非常に幸せだ」と、ヴィオレッタに対する熱い想いを歌う。

フンパーディンクについて

エンゲルベルト・フンパーディンク（Engelbert Humperdinck, 1854-1921）はドイツの作曲者である。ワーグナーの信頼も厚く、1980-1981年にバイロイトでワーグナーの最後の作品『パルジファル』が上演された際、補佐をしている。

いくつかの劇音楽の作品を残しているが、『ヘンゼルとグレーテル』のみが数少ないメルヘン・オペラとして、現代でも各国で上演されている。

1

『ヘンゼルとグレーテル』より “踊りましょうよ”（二重唱）

1890年に実妹のウェルト夫人が家庭劇として脚色した『ヘンゼルとグレーテル』の作曲を手がけたが、その後、台本を書き直してもらい、最終的には三幕からなる楽劇に仕上げた（1893年）。

この重唱は第一幕がはじめてしばらくして歌われる。二人は仕事をするが腹が減って仕事にみが入らない。グレーテルは、兄に隣のおばさんからもらったミルクが壺に入っていることを教える。二人は楽しくやろうと、ダンスを踊り出す。冒頭のグレーテルが歌う旋律は「貧乏」を表すライト・モチーフでもあり、オペラ全体にしばしば出現する。仲の良い二人の兄妹で、動きをともなった可愛い音楽が展開される。なお、この曲は作曲者が曲中で最初に手がけた音楽である。

マスネについて

ジュール・エ・フ・マスネ（Jules Emile Frédéric Massenet, 1841-1912はワーグナーより29才年下のフランスの作曲家である。彼はオペラの作曲家として成功を収め、数多くのオペラ作品を作曲しているが。特に『マノン』、『ウェルテル』は現在でもしばしば演奏させる。またオペラ『タイス』の第2幕、第1場と第2場の間奏曲として書かれた「タイスの瞑想曲」は、非常に多くのコンサートで演奏されるポピュラーな名曲となっている。彼は、ワーグナーのライト・モチーフの手法を採り入れているが、その用法はワーグナーとは異なり、極めて甘美である。

マスネ 『ウェルテル』より “手紙の歌”

原作はドイツの文豪ゲーテのシュトルム・ウントドランク（疾風怒濤）期の小説『若きウェルテルの悩み』で、1892年に初演されている。1884年に作曲された『マノン』に比べ、ワーグナーの影響がさらに色濃く窺える作品である。

物語の概要は、多感な詩人ウェルテルは、許婚者のいるシャルロットに対して強い恋慕を抱くが、シャルロットの結婚後も、その想いはさらに強くなり、愛を告白する。しかし、貞淑なシャルロットは彼に好意を抱いていても、彼の愛を受け入れることが出来ない。そして、絶望したウェルテルがピストル自殺をする、というものである。

“手紙の歌”第3幕：クリスマスの夜。机に向かってシャルロットはウェルテルの手紙を読む。心の中で、ウェルテルに好意を抱いている彼女は“ウェルテル！ウェルテルが私の心にいることを誰が想像できたかしら”と歌う。最初は4/4拍子ではじまるが、喜びと、悲しみの間を揺れ動く彼女の心を表すかのように、調も拍子も変化して行く。

ワーグナーについて

W・リヒャルト・ワーグナー（Wilhelm Richard Wagner : 1813-1888）は、ヴェルディと並ぶ、19世紀最大の劇音楽の作曲家であるだけでなく、指揮者としても先駆的な活動をし、その他、論文などの著作も多く残している。そして自作のオペラ、楽劇の台本はすべて自分自身で書いている。19世紀後半～20世紀初めにかけて、音楽界のみならず、芸術、思想の

分野にまで非常に大きな影響を残した芸術家である。彼については今月号の特集をお読みいただきたいと思う。

『タンホイザー』より “エリザベートの祈り”

第2幕の歌合戦場で、タンホイザーは禁欲的にすぎる友ヴォルラムの歌に対抗し、愛はもっと情熱的でなければならぬと、「肉欲讃歌」歌い快樂の女神ヴェーヌスを讃える。騎士達は激怒して、タンホイザーに向かって剣を抜く。領主は巡礼となってローマに行き法王の許しをうるまで帰って来てはならぬと告げる。

エリザベートは聖母マリア像の前に跪き、タンホイザーが許されるよう祈る。しかし巡礼から戻った人々の中に彼の姿はない。絶望したエリザベートは自分の命を捧げる代わりに、タンホイザーを許すように祈る。変ト長調ではじまるこのアリアは、気高く聖らかである。ワーグナーの音楽を嫌う人も多いが、この曲からはワーグナーならではの深い内面性が感じられる。

歌曲『ヴェーゼンドクによる5つの詩』より “停まれ”、“夢”

政治犯として追われる身であったワーグナーはスイスのチューリッヒの富豪、ベーゼンドクの庇護を受け、落ち着きを取り戻す。しかし、彼の若く美しい妻、マティルデを愛するようになる。この歌曲はそのマティルデの詩に作曲したもので、“停まれ”は第2曲

“夢”は第5曲を構成している。ところで自分の恩人の妻との許されざる恋は諦めざるをえず、ここで得た内面的体験は、次作『トリスタンとイゾルデ』に大きな影響を及ぼしている。音楽的にも、後に『トリスタンとイゾルデ』に使われる楽想が現れており、“夢”（変イ長調 3/4）の楽想は、同作品の第2幕の二重唱で拍子を変えて使われている。

リヒャルト・シュトラウスについて

リヒャルト・ゲオルク・シュトラウス (Richard Georg Strauss, 1864-1994) はホルン奏者だった父の子として生まれ、幼い頃から音楽の英才教育を受け、少年時代にすでに完成度の高い作品を残している。指揮者としても活動し、1894年にはパイロイトで指揮をしている。交響詩などの他、劇音楽作品も多く、ワーグナーの才能ある後継者とみなされる。

『ナクソス島のアリアドネ』より “偉大なる王女様”

R. シュトラウスの劇音楽作品としては『サロメ』、『薔薇の騎士』が知られているが、このホーフマンスタールの台本による一幕のオペラは、もともとはモリエールの『にわか貴族』の劇中劇として書かれたものであった。1916年に『ナクソス島のアリアドネ』として完成し、同年10月にウィーンの宮廷劇場で初演されている。この作品では、『サロメ』に見られた前衛性は陰を潜めているが、巧みな転調法や、36人の小規模なオーケストラを効果的に使う管弦楽法など、見事な職人芸がうかがえる。この作品は、一幕のオペラということになっているが、序幕があり、そこでは、オペラ上演を巡って起こる舞台裏のゴタゴタが喜劇的に書かれている。

“偉大なる王女様”は、夫に捨てられ、ナクソス島に一人残され失意の底にあるアリアドネを慰めようと、踊り子のツェルビネッタが歌うレシタティーボとアリアである。アリアは変ニ長調 3/4 のアレグロ・モッソから始まり、コロラトゥーラの技術を生かしたアレグロ・

スケルツァンドの部分が続き、最後にアレグロのロンドーとなる。三点ホ音が何度も出現するなど、高度な声楽技術を必要とする難曲である。

プッチーニについて

ジャコモ・プッチーニ (Giacomo Antonio Domenico Michele Secondo Maria Puccini, 1858 - 1924) は、ヴェディの後継者と呼ぶに相応しく、『ラ・ボエーム』、『トスカ』、『蝶々夫人』などは、今日でも最も多く公演される機会が多い作品となっている。その叙情的な旋律とそれを支える管弦楽の美しいハーモニーを好む人は多く、日本人に最も人気のある西洋のオペラ作曲家かもしれない。

『つばめ』より “ドレッタの素敵な夢”

「つばめ」は、プッチーニのオペラ作品の中では、それほど演奏されない方の部類に入る作品だが、短く美しいこのアリアは、演奏会などでしばしば歌われる。銀行家ランバルトのお妾さんとなった美しい女性マグダが、パーティで歌う歌である。(へ長調 4/4)

「誰がドレッタの夢を推し量ることが出来るでしょう」と歌うこの曲は、小品だが美しく可愛らしいアリアである。

『マノンレスコー』より ”なんとすばらし美女”

『マノンレスコー』はマスネの『マノン』と同様、フランスの作家プレヴォーの長編小説『騎士デ・グリユーとマノン・レスコーの物語』を題材としている。マスネの作品の評価も高いため、それを上回る作品を書こうと、台本についてなど慎重に準備された。

マノンの美しさに惹かれたデ・グリユーは、マノンの素性を聞き、自分も素性を語る。マノンも心をうたれ「夜更けと」約束して家の中に入る。デ・グリユーは”なんとすばらし美女”と歌う。この変口長調 3/4 のアリアは、プッチーニがテノールのために書いたアリアのうち、もっとも美しいものの一つで、美声のテノールが歌えば、聴衆はうっとり魅了され我を忘れる。しかし、ゆっくり目のテンポで高い音域まで美しく歌わなければならないため、歌うにはなかなか難しい曲でもある。

『ローエングリン』より “婚礼の合唱”

この音楽については、説明する必要がないほど有名で、結婚式などの席上でしばしば流される。しかし、オペラのストーリーでは、エルザが夢に見た白鳥の騎士ローエングリンが、実際に現れ、彼女の弟殺しの無実を証明し、二人はめでたく結婚することになったのに、「決して私の素性を訪ねないように」とローエングリンが念を押した誓いを、彼女は心の不安から破ってしまい、その結果、エルザは最愛の人と別れねばならなくなる。

物語を考えると結婚式の演奏曲としては縁起が悪くあまり相応しくないような気もするが、それでもよく演奏されるのは、この曲が厳かで気品があり、結婚式の場に相応しいからであろう。よく知られた曲ではあるが、ワーグナーのよい面が発揮されたと言えよう。

会と会員の情報

1. CMDJ 会と会員のスケジュール

8 月

- 3日(土) 廣瀬史佳 — 河口湖音楽祭 名曲コンサート ～世界の街角から～
打楽器：池上英樹 ピアノ：廣瀬史佳
C. コリア：スペイン、バルトーク：ルーマニア民俗舞曲、ガーシュイン：
パリのアメリカ人 他
【河口湖円形ホール 17:30 ? 3,000- 高校生以下? 1,500-
問合せ：河口湖ステラシアター0555-72-5588】
- 4日(日) 高橋通・高橋澄子 — 第29回ことさマーコンサート
演奏曲：八橋検校：みだれ、唯是震一：神仙調舞曲、高橋通：箏のための小協
奏曲第2番「西からの風」ほか【小田原市生涯学習センターけやきホール 午
後2時開演 入場料1500円】
- 22日(木) 栗栖麻衣子(Pf.)他出演 — つぼみの会 子育て応援コンサート
*11:00 あいうえおんがくかい
*12:30～いろはにほっとコンサート *15:30～かきくけコンサート(全3回公演)
【熊谷市文化創造館さくらめいと月のホール各部とも一般・小学生以上500円未
就学児無料 通し割引券あり 【問合せ：事務局 80-3310-4238 日本音楽舞
踊会議後援事業】
- 24日(土) 滝澤三枝子(Pf) — ピアノリサイタル～煌めく鍵盤～
共演：長谷川泰子(Sop) 紡ぎ歌(メンデルスゾーン) 「練習曲」別れの曲(シ
ョパン) わが母に教え給えし歌(ドヴォルザーク) アルハンブラの思い出
(タレガ) 他【板橋区立文化会館小ホール 午後5時開演 2500円】
- 30日(金) 第8回邦楽器とともに～新作歌曲を揃えて～
金藤豊作曲：「若葉」 他、高橋通作曲「風花」高橋澄子(箏)【津田ホール
18:30開演 自由席3500円 主催：一般社団法人 波の会日本歌曲振興会】

9 月

- 16日(月) 深沢亮子(Pf.)デビュー 60周年リサイタル 連弾と2台のピアノ作品による
共演：野原みどり、小沢麻由子、五味田恵理子、栗栖麻衣子
予定 モーツァルト、ドビュッシー、フォーレの作品
【浜離宮朝日ホール 14:00開演 問合せ：03-3561-5012 (新演奏家協会)】
- 19日(木) 北川暁子(Pf) 北川靖子(Vn) クラシックと能楽
能「舍利」友枝雄人 他 ピアノとヴァイオリンのためのソナタへ長調 kv. 376 (モ
ーツァルト) ロンディーノ/ウィーン奇想曲/中国の太鼓(クライスラー) 他【セ
ルリアンタワー能楽堂 午後6時30分 全席指定8000円】 (チケット申し
込み Bunkamura チケットセンター 03-3477-9999)
- 21日(土) 浜尾夕美(Pf.) — ピアノリサイタル ノスタルジー～ロシアの巨匠たち
スクリャービン：ピアノソナタ第3番、メトネル：ソナタ「回想」、ラフマニノフ：
絵画的練習曲集より他 日本音楽舞踊会議後援事業
【浜離宮朝日ホール 18:00開演 問合せ：03-3561-50128 新演奏会協会】
- 26日(木) CMDJ 2013年オペラコンサート

【すみだトリフォニー 小ホール

(詳細は本文 44P. 掲載のコンサートプログラムをご参照ください。)

30日(月) 深沢 亮子(Pf.) 翔の会 モーツァルト公開講座【10:00~会場未定】

10月

4日(木) 太田恵美子(Pf.) 八木宏子(Pf.) - 第11回チャリティーコンサート
ブラームス: ヴァイオリンソナタ第3番 Op. 108、ラフマニノフ: 前奏曲
Op. 3-2「鐘」他、ゲスト出演: B. B. モフラン Congo Square Band (コンゴ民
主共和国出身) 【調布市グリーンホール(小)、開演 19:00 入場料: 一般
2500円 学生: 2000円】 共催: NPO 法人「少年ケニヤの友」、「おといろい
ろ」

28日(月) 様々な音の風景X ~20世紀以降の音楽とその潮流~

【すみだトリフォニー 小ホール 18:45開演 前売券 3,000円

問合せ: 日本音楽舞踊会議 電話 03-3369-7496】

演奏曲

高橋 通: ヴァイオリンと箏のためのソナタ第2番より

演奏: 北川靖子(vn) 高橋澄子(箏)

三善 晃: アン・ヴェール (En Ver)

演奏: 栗栖麻衣子(pf)

桑原洋明: ヴァイオリンとピアノのための2章

演奏: 向山有輝(vn) すすき みゆき(pf)

ロクリアン・正岡: 弦楽四重奏曲第二番「あの世から愛されし喜怒哀楽」
- 娘、ナナリアンに捧ぐ 演奏: アティレ弦楽四重奏団

メシアン: 「アーメンの幻影」-2台のピアノのためのより 第1, 5, 7番
戸引小夜子、本田尚美(pf)

北條 直彦 弦楽四重奏のための「響相」

演奏: 栗津惇、青山英里香(vln) 武田麻耶(vla) 奥村景(vc)

浅香 満: MINAKUCHI「異聖歌童謡集」より「水口」「流れゆくもの」他
詩集「長袖の秋」(詩 黒木瞳)より「忘れ時計」「秋の夜」他

演奏: 川原井泰江(sop) 植田さやか(pf)

シェーンベルク: 三つのピアノ小品 op. 11

演奏: 北川暁子(pf)

シェーンベルク: 幻想曲 op. 47 演奏: 北川 靖子(vln) 北川 暁子(pf)

11月

2日(土) 並木桂子(Pf.) 原宿・週末のひととき~ 癒しのモーツァルト&情熱の
ベートーヴェン1~ モーツァルト ピアノソナタ K. 281 きらきら星
変奏曲 ベートーヴェン ピアノソナタ“悲愴” 他

【原宿アコスタジオ 19:00 3,500円(小学生、学生割引有り)

お問合せ: 080-3003-2102 アラベスク】

8日(金) 若い翼によるCMDJコンサート6

【すみだトリフォニー小ホール(詳細未定)】出演者募集中

11日(月) 深沢 亮子(Pf.) - 翔の会 公開レッスン

【10:00~ 会場未定】

25日(月) 深沢亮子(Pf.) 共演: 本田昌子 モーツァルト: 2台のピアノのための
協奏曲 F Dur K. 242 指揮: 新田 孝 オーケストラ: NIPPON SYMPHONY

【文京シビックホール 18:30 問合せ:090-6927-3447】

12 月

2日(月) 並木桂子 (Pf.) 共演: 岸洋子 (Pf.) 印田千裕 (Vn.) 松葉春樹 (Vc.)
関森温子 (Sop.) アレンスキーの魅力 Vol.1 2台ピアノの為の組曲 第
1、2番、ピアノトリオ第1番、歌曲
【杉並公会堂 (小) 19:00 3,500円 (小学生、学生割引有り)
お問合せ: 080-3003-2102 アラベスク】

6日(金) 深沢亮子とその仲間による“ピアノと室内楽の夕べ”(仮称)
出演: 深沢亮子 (Pf.) 恵藤久美子 (Vn.) 安田謙一郎 (Vc.)
助川敏弥: Gismonda (2010~2011)、ちいさきいのちのために (2004)
モーツァルト: ピアノトリオ G-Dur K. 564
ミヨー: ヴァイオリンとチェロのためのソナチネ Op. 324
モーツァルト: ピアノトリオ C-Dur K. 548 【音楽の友ホール】

8日(日) 栗栖麻衣子 (Pf.) 他出演
ーぴあの×ぴあの~2台ピアノによるコンサートリスト: 交響詩 前奏曲、
ラフマニノフ: 組曲第2番、ブラームス: ハイドンの主題によるヴァリエーシ
ョン、2台8手、2台12手作品他
【熊谷文化創造館さくらめいと太陽のホール 一般 2000円/高校生以下
1500円 問合せ: 事務局 080-3310-4238 日本音楽舞踊会議後援事業】

2014年

1 月

18日(土) 深沢亮子 (Pf.) 共演: 瀬川祥子 (Vn.) 水谷川優子 (Vc.)
モーツァルト ピアノとVnのためのソナタ e moll K. 304
シューベルト アルペジオーネ・ソナタ a moll D-821
シューベルト ピアノ・トリオ No1 B-Dur D-809
【新宿住友ビル7F 朝日カルチャーセンター16:00 問合せ:
朝日カルチャーセンター03-3344-1945】

19日(日) 声楽部会公演「2014年 新春に歌う」(仮称)
【すみだトリフォニー小ホール(昼間公演)】

3 月

10日(月) 邦楽部会コンサート(仮称)
【すみだトリフォニー小ホール(詳細企画)】

4 月

10日(金) フレッシュコンサート2014【すみだトリフォニー小ホール(詳細未定)】

5 月

26日(月) 作曲部会公演 【すみだトリフォニー小ホール(詳細未定)】

6 月

13日(金) ピアノ部会公演【オペラシティリサイタルホール(詳細未定)】

7月

7日（月）声楽部会公演【すみだトリフォニー小ホール（詳細未定）】

会員スケジュールの表示（凡例）について

ゴシック体文字は日本音楽舞踊会議主催（含む、各部会主催）公演予定です。

明朝体文字は会員から寄せられた情報、会関係者が企画、参加して居る事業や公演の情報です。

明朝体太文字は、本会の運営に関わる会議等の予定です。

※「会員から寄せられた情報」等は原文に準じますが、文字数の制限上、項目内容等を変更する場合があります事をお断りします。

2. 新入会員挨拶

杵屋勝真代（きねや かつまよ 正会員・長唄三味線）



1940年 東京生まれ

長唄、正邦楽の三味線弾きです 50年位前 杵屋正邦先生の門下生として 佐薙のり子さん 杵屋静子さん 杵屋五峰さん 4人で「豊の会」という演奏グループをつくっていました。その佐薙さんに この度 推せんをいただいて入会させていただきました 他ジャンルの演奏家の方達と交流の少ない世界です この会でいろいろ勉強出来ますこと とても楽しみにしております どうぞよろしくお願い申し上げます

上埜マユミ（うえの まゆみ 青年会員・ピアノ）

北海道出身。3才よりピアノを始める。北星学園女子高等学校音楽科卒業。

国立音楽大学音楽学部演奏学科卒業。国立ショパンアカデミー学院、サマーセミナーにてディプロマ取得。

これまでに渡辺卓、浜尾夕美、戸引小夜子、エフゲニー・ザラフィアンツ、イエージェイ・ロマニウクの各氏に師事。

以前から色々なコンサートに出演させていただいていますが、今年は、ソロはもちろん、声楽や器楽の伴奏を中心に勉強していきたい。また、他の会員様との交流も深めていきたいと思っております。



編集後記

今夏は7月に入ると、梅雨を乗り越し猛暑となりました。通年の梅雨の時期に殆ど雨が降らなかった
ので水不足が心配されますが、7月も下旬にさしかかると、梅雨の戻りのような雨の日が多くなって来
たようです。ところで、今年は19世紀の劇音楽の二人の巨匠、ワーグナーとヴェルディの生誕200年
の年に当たります。本会では9月26日(木)開催のオペラコンサートで、二人の巨匠の生誕200年
にちなんで『愛の葛藤』というタイトルのもと、オペラアリア中心としたコンサートを開催します。幅広
い世代の歌手が、十分に練習を重ね、精魂を込めて歌うと思いますので、聴き応えのあるコンサートと
なることが期待できます。多くの方々のご来場をお待ちしております。ところで、秋のコンサートシー
ズンの前に、夏を乗り切らねばなりません。疲れをとるには、マグロ、カツオ、鳥の胸肉など効果があ
るそうです。栄養と睡眠を十分にとって、夏を乗り切ろうじゃありませんか。

(編集長：中島洋一)

本誌は次のところでお取り次ぎしています

北海道	ヤマハ・ミュージック札幌店	011-512-1726
福島	福島大学生協	024-548-0091
千葉	紀伊国屋書店千葉営業所	043-296-0188
東京	オリオン書房外商部	042-529-2311
	(株)紀伊国屋書店 和雑誌アクセスセンター	03-3354-0131
	アカデミア・ミュージック(株)	03-3813-6751
	全国学生生協連合会図書サービス	03-3382-3891
	早稲田大学生協ブックセンター	03-3202-3236
神奈川	昭和音楽大学購買店	046-245-8100
静岡	吉見書店	054-252-0157
愛知	正文館書店外商部	052-931-9321
	マコト書店	052-501-0063
大阪	(株)ヤマミュージック大阪心斎橋店	06-211-8331
	ユーゴー書店	06-623-2341
兵庫	(株)ジュンク堂書店 外商部	078-262-7794
京都	龍谷大学生協書籍部	075-642-0103
沖縄	沖縄教販(株)	098-868-4170

編集長：中島洋一 副編集長：橘川 琢 高橋 通 湯浅玲子

編集部員：新井知子 浦 富美 大久保靖子 栗栖麻衣子 小西徹郎 高島和義 高橋雅光
戸引小夜子 北條直彦

音楽の世界8月号(通巻551号)

2013年8月1日発行 定価500円(本体476円)

発行人：英二 三枝子

編集・発行所 日本音楽舞踊会議 The CONFERENCE of MUSIC and DANCE JAPAN

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-1-6 寿美ビル305 Tel/Fax:(03)3369 7496

HP: <http://cmdj1962.com/> E-mail: onbukai@mua.biglobe.ne.jp

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/> (アーカイブ)

A/D: 音楽の世界編集部 Tel: (03)3369 7496 印刷: イゲタ印刷(株) Tel: (04)7185 0471

購読料 年間:5000円 (6ヶ月:2500円) 振替 00110-4-65140 (日本音楽舞踊会議)

*日本音楽舞踊会議会員会費の中に、購読料が含まれております

*乱丁、落丁がございましたらお取替えします